

福 岡 市

那珂久平遺跡

I

福岡市埋蔵文化財調査報告書第133集

1986

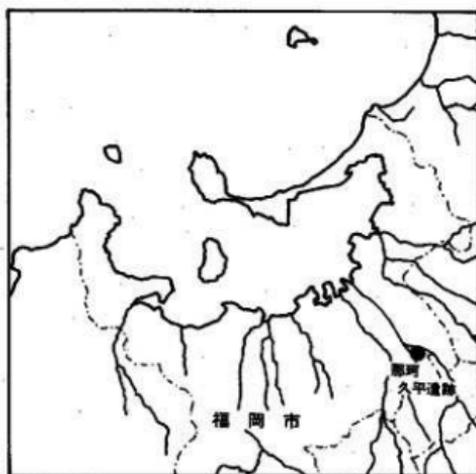
福岡市教育委員会

福岡市

那珂久平遺跡

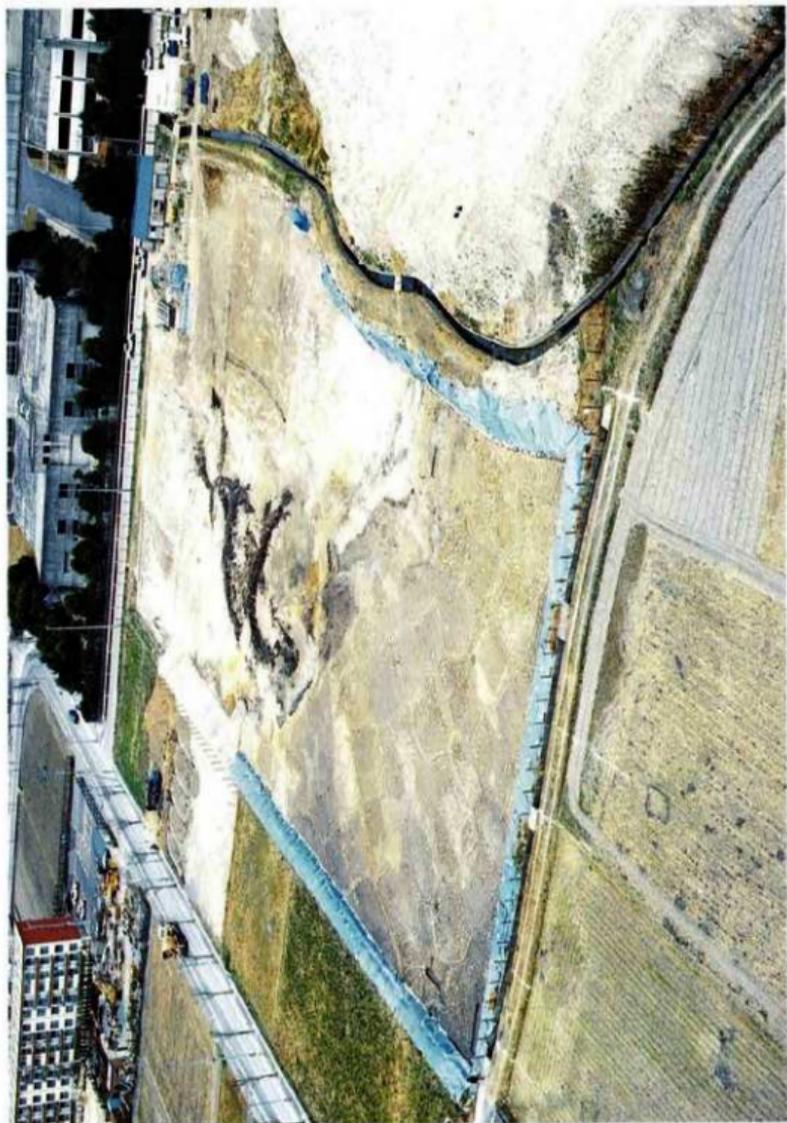
I

福岡市埋蔵文化財調査報告書第133集

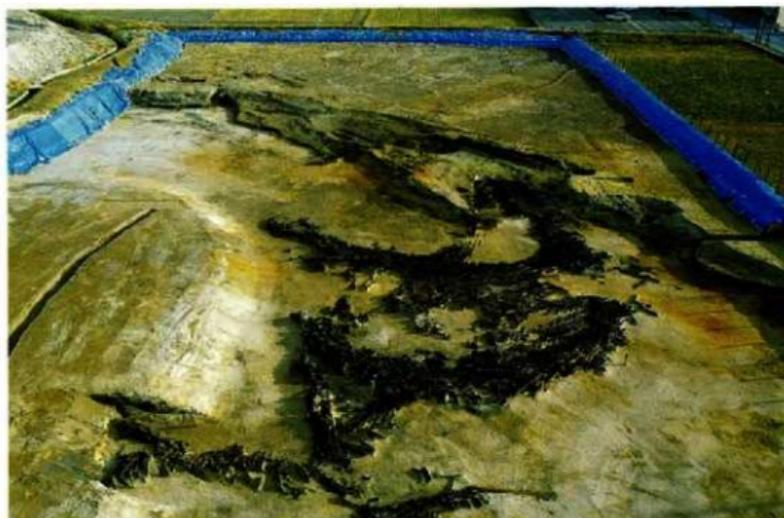


1986

福岡市教育委員会



下層水田趾全景 (東より)



(1) 弥生時代井堰・下層水田址 (北西より)



(2) 下層水田址 (北東より)

序 文

国指定史跡板付遺跡の周辺部は、弥生時代から近世にいたる遺跡の宝庫でもあります。この報告書は、板付遺跡の北に隣接する那珂久平遺跡の調査報告書です。

那珂久平遺跡は、周囲の那珂君休遺跡・那珂ヲサ遺跡などと共に一連の水田遺跡を形成している地域です。とくにこの地は古代の那珂郡衙の所在地に比定されており、調査に期待がもたれました。今回の調査では弥生時代後期に設けられた長さ30mにもおよぶ大規模な井堰、古墳時代の水田址、条里遺構、中世の水田址などが検出されました。

本書が市民の皆さまに広く活用されますとともに、学術研究の場でも貢献できますことを願っております。調査に際して御協力、御指導を賜りました多くの方々に深甚なる謝意を表します。

昭和61年3月31日

福岡市教育委員会

教育長 佐 藤 善 郎

例 言

1. 本書は、福岡市博多区那珂4丁目において調査された埋蔵文化財の発掘調査報告書である。本遺跡は、小字名をとって那珂久平遺跡と呼ぶことにする。
2. 本遺跡の調査以前に、隣接する那珂君休遺跡の第2次調査が行なわれた。本遺跡における上層水田址は君休遺跡のⅢ層水田址に、下層水田址はⅤ層水田址に対応する。
3. 本書の執筆・編集は力武卓治・大庭康時が協議して行なった。
4. 発掘調査に先立って、宮崎大学助教授藤原宏志先生によってプラント・オパール分析がなされた。また、本書の付論として、その成果を報告していただいた。なお、藤原先生の文中において、Ⅲ層水田址は上層水田址を、Ⅴ層水田址は下層水田址を指していることをお断りしておく。
5. 本書に掲載した遺物番号は、すべて通し番号とした。この通し番号は、実測図・写真とも一致している。
6. 遺構の実測には、山口満・池田光男・河野徹也・村田喜代美・実淵祥子氏の御協力をいただいた。また、航空測量は、御朝日航洋の手になる。
7. 第1号溝出土のナイフ形石器の実測・トレース及び所見は、福岡市埋蔵文化財課小畑弘巳氏にお願いした。
8. 資料整理にあたっては、生垣綾子・小金丸京子・酒井もと子・木永とし子・深沢美代子・村田喜代美・副島智子・鶴ちとせ・実淵祥子・川嶋文佐子・林朝美・世利裕美・寺田康子・中村美穂・福益貴子・金子幸世・北原章子・松本美保・池田光男・山口満氏らの御協力をえた。

本文目次

第一章 はじめに	1
1. 発掘調査にいたる経過	1
2. 発掘調査の組織と構成	1
3. 遺跡の立地と環境	2
第二章 発掘調査の記録	5
1. 発掘調査の概要と経過	5
2. 基本順序	7
3. 上層水田址	8
4. トレンチ及び、トレンチ出土遺物	14
5. 中層遺構面	18
6. 第1号溝・第2号溝・第3号溝	21
(1) 第1号溝	21
(2) 第2号溝	26
(3) 第3号溝	28
7. 下層水田址	30
8. 護岸杭列・SX01・簀状遺構	38
(1) 護岸杭列	38
(2) SX 01	38
(3) 簀状遺構	39
9. 弥生時代水田址	43
第三章 まとめ	46
1. 中世水田址（上層水田址）について	46
2. 中層遺構面について	47
3. 条里遺構について	47
4. 古墳時代水田址（下層水田址）について	50
5. 調査上の問題点	52
付論 那珂久平遺跡における水田址の調査研究 宮崎大学 藤原宏志・松田隆	53

挿 図 目 次

Fig. 1	周辺遺跡分布図 (1/25,000)	3
Fig. 2	調査地点図 (1/2,000)	5
Fig. 3	土層柱状図 (1/40)	7
Fig. 4	上層水田址遺構実測図 (1/800)	9
Fig. 5	IIb 層出土遺物 (1/3)	11
Fig. 6	上層水田址出土遺物 (1/3)	13
Fig. 7	トレンチ配置図 (1/1,000)	14
Fig. 8	トレンチ出土遺物 1 (1/3)	15
Fig. 9	トレンチ出土遺物 2 (1/3・1/1)	17
Fig. 10	中層遺構面遺構実測図 (1/250)	19
Fig. 11	中層遺構面出土遺物 (1/3)	20
Fig. 12	第 1 号・2 号・3 号溝遺構実測図 (1/300)	21
Fig. 13	第 1 号溝土層断面実測図 (1/50)	22
Fig. 14	第 1 号溝・旧河川左岸山出土遺物 (1/3)	23
Fig. 15	第 1 号溝出土軒丸瓦瓦当 (1/3)	23
Fig. 16	第 1 号溝出土遺物 (1/3)	25
Fig. 17	第 1 号溝出土石器 (1/1・1/2)	26
Fig. 18	第 2 号溝断面 (1/50)	27
Fig. 19	第 2 号溝・第 3 号溝出土遺物 (1/3)	27
Fig. 20	第 3 号溝断面土層 (Tr-22) 実測図 (1/100)	29
Fig. 21	下層水田址遺構実測図 (1/400)	31
Fig. 22	水田址高低模式図	32
Fig. 23	水田㊸→㊹水口実測図 (1/50)	34
Fig. 24	水田㊸水口実測図 (1) ㊺→㊻ (2) ㊼→㊽ (3) ㊾→㊿ (1/50)	35
Fig. 25	下層水田址出土遺物 (1/3・1/1)	37
Fig. 26	SX01 遺構実測図 (1/100)	39
Fig. 27	箆状遺構実測図 (1/50)	40
Fig. 28	箆状遺構出土遺物 (1/3)	41
Fig. 29	箆状遺構出土石器 (1/4)	42

Fig.30	Tr-24・Tr-25配置図	43
Fig.31	旧河川右岸トレンチ (Tr-24) 土層実測図 (1/100)	45
Fig.32	旧河川左岸トレンチ (Tr-25) 土層実測図 (1/100)	45
Fig.33	推定那珂郡衙 (1/5,000)	49
Fig.34	那珂君休遺跡・那珂久平遺跡古墳時代水田遺構図 (1/2,000)	51
付論 図1	古代水田址分布域の分析的推定	54
図2	福岡・那珂久平遺跡におけるプラント・オバール分析	55
図3	那珂久平遺跡第Ⅲ層における水田址包蔵域の推定	56
図4	那珂久平遺跡第Ⅴ層における水田址包蔵域の推定	57

表 目 次

表1.	下層水田址面積一覧表	33
-----	------------	----

付 図 目 次

付図1. 上層水田址全体図 (航空測量, 1/200)

付図2. 下層水田址全体図 (航空測量, 1/200)

図 版 目 次

本文対照頁

PL. 1	(1) 調査前(北より) (2) 調査前(民有地部分・西北から)	5
PL. 2	(2) 土層柱状図 No 1 (2) 土層柱状図 No 2 (3) 十層柱状図 No 3 (4) 上層柱状図 No 4	7
PL. 3	(1) 上層水田址(北東より) (2) 上層水田址(南西より)	8
PL. 4	(1) 上層水田址(北より) (2) 上層水田址(北西より)	8
PL. 5	(1) 上層水田址(東南より) (2) 上層水田址(北東より)	8
PL. 6	(1) 上層水田址(民有地・北西より) (2) 上層水田址(民有地・西より)	8
PL. 7	(1) 上層水田址畦畔(北東より) (2) 上層水田址畦畔(南西より)	8
PL. 8	(1) 上層水田址畦畔(南西より) (2) 上層水田址畦畔(北東より)	8
PL. 9	(1) 上層水田址畝状遺構(北東より) (2) 上層水田址畝状遺構(南西より)	10
PL. 10	(1) Tr- 2. 土層状況(北より) (2) Tr- 2. 旧河川十層状況(西北より)	14
PL. 11	(1) Tr- 12. 土層状況(西より) (2) Tr- 13. 土層状況(西より)	14
PL. 12	(1) Tr- 13. 十層状況(北西より) (2) Tr- 13. 土層状況(北西より)	14
PL. 13	(1) Tr- 15. 十層状況(南東より) (2) Tr- 16. 土層状況(北東より)	14
PL. 14	(1) Tr- 16. 土層状況(西北より) (2) Tr- 16. 上層状況(西北より)	14
PL. 15	(1) Tr- 16. 土器出土状況(西北より) (2) Tr- 16. 土器出土状況	14
PL. 16	(1) Tr- 19. 土層状況(西より)	14
	(2) 中層遺構面土器出土状況(東南より)	18
PL. 17	(1) 中層遺構面溝群(北東より) (2) 中層遺構面溝群(南東より)	18
PL. 18	(1) 第1号溝・第2号溝・第3号溝遠景(北東より) (2) 第1号溝上層状況(東南より)	21
PL. 19	(1) 第1号溝軒丸瓦出土状況(南東より) (2) 第1号溝軒丸瓦出土状況(南西より)	21

PL.20	(1) 第1号溝(南東より) (2) 第1号溝(北西より)	21
PL.21	(1) 第1号溝(西より)	
	(2) 第1号溝A-A'断面土層状況(南東より)	21
PL.22	(1) 第1号溝・第2号溝土層状況(北西より) (2) 第2号溝(南より)	26
PL.23	(1) 第3号溝検出中(北西より) (2) 第3号溝土層状況(南より)	28
PL.24	(1) 第3号溝土層状況(Tr-22.北より)	
	(2) 第3号溝土層状況(Tr-22.北より)	28
PL.25	(1) 第3号溝土層状況(Tr-22.北より)	
	(2) 第3号溝土層状況(Tr-22.北より)	28
PL.26	(1) 下層水田址足跡検出状況 (2) 下層水田址足跡検出状況	30
PL.27	(1) 下層水田址・井堰遺構全景(西より)	
	(2) 下層水田址・井堰遺構全景(南より)	30
PL.28	(1) 下層水田址・井堰遺構全景(東より)	
	(2) 下層水田址全景(南西より)	30
PL.29	(1) 下層水田址全景(北東より) (2) 下層水田址全景(西北より)	30
PL.30	(1) 下層水田址河岸(西より)	
	(2) 下層水田址、手前より、㉑㉒㉓(西より)	30
PL.31	(1) 下層水田址(東より大畦畔、㉔㉕をのぞむ)	
	(2) 下層水田址、㉖(南より)	30
PL.32	(1) 下層水田址、手前より、㉗㉘(南西より)	
	(2) 下層水田址、㉙(南より)	30
PL.33	(1) 下層水田址、㉚ 畦畔沿足跡(西北より)	
	(2) 下層水田址、㉛ 畦畔沿足跡(北より)	30
PL.34	(1) 下層水田址水口 手前より、㉜、㉝(西より)	
	(2) 下層水田址水口 左より、㉞、㉟(南より)	33
PL.35	(1) 下層水田址水口 手前㊱、左㊲、右㊳(西より)	
	(2) 下層水田址水口 左㊴、右㊵(南より)	33
PL.36	(1) 下層水田址水口 手前㊶、㊷(東より)	
	(2) 下層水田址水口 手前㊸、㊹(西より)	33
PL.37	(1) 下層水田址水口 手前㊺、㊻(南より)	
	(2) 下層水田址水口 左㊼、右㊽(東南より)	33
PL.38	(1) 下層水田址水口 手前㊾、㊿(北西より)	

	(2) 下層水田址水口 左前㊸、右㊹ (北東より)	33
PL.39	(1) 下層水田址水口 左㊺、右㊻ (北東より)	
	(2) 下層水田址水口 手前㊼、㊽ (西南より)	33
PL.40	下層水田址三叉畦畔	33
PL.41	(1) SX01 (西北より) (2) SX01 (東南より)	38
PL.42	(1) SX01 (西より) (2) SX01 (西より)	38
PL.43	(1) 筒状遺構 (南より) (2) 筒状遺構 (東より)	39
PL.44	(1) 筒状遺構 (北より) (2) 筒状遺構 (東より)	39
PL.45	筒状遺構木製品出土状況	39
PL.46	(1) Tr 24 土層状況 (東より)	
	(2) Tr-24 土層状況 (東北より)	43
PL.47	(1) 井堰遺構右岸接岸部分 (西より)	
	(2) Tr-25 土層状況 (西南より)	43
PL.48	(1) Tr-25 土層状況 (西より) (2) Tr-25 土層状況 (西より)	43
PL.49	(1) IIb 層出土遺物 (1/5) (2) 上層水田址出土遺物 (1/5)	10
PL.50	トレンチ出土遺物 (1/5 39…1/5)	15
PL.51	(1) 中層遺構面出土遺物 (1/5) (2) 第1号溝出土遺物 1 (1/5)	20・23
PL.52	第1号溝出土遺物 2 (1/5)	23
PL.53	(1) 第1号溝出土遺物 2 (1/5、72・73…1/5、74…1/5)	23
	(2) 第2号溝出土遺物 (1/5)	27
PL.54	(1) 下層水田址出土遺物 (1/5、91…1/5、92…1/5)	37
	(2) 筒状遺構出土遺物 (1/5)	41

巻頭図版

- 1 下層水田址全景 (東より)
- 2 (1) 弥生時代井堰・下層水田址 (北西より) (2) 下層水田址 (北東より)

第一章 はじめに

1. 発掘調査にいたる経過

福岡市の那珂・板付一帯は、近年住宅地として開発が進み、人口が急増している地域である。それに伴い、小学校の不足が問題となり、昭和60年4月開校を目的に、博多区那珂4丁目に小学校建設が計画された。福岡市教育委員会施設部管理課から申請を受けた文化課では、1957年12月10～16日、試掘調査及びプラント・オパール試料採取を行なった。1度、当該地の西南に隣接する那珂君休遺跡では、中世と古墳時代の水田跡の調査がなされていたが、試掘調査とプラント・オパール分析の結果、那珂君休遺跡と類似した内容を持つ水田遺跡の存在が推定された。それをうけて、文化課と施設部管理課の間で協議が重ねられ、調査期間を6ヶ月として、1958年5月27日より発掘調査を実施することとなった。

2. 発掘調査の組織と構成

調査主体 福岡市教育委員会文化部文化課埋蔵文化財第1係（現埋蔵文化財課1係）
事務担当 柳田純孝（係長、現埋文課長）折尾学（現1係長）古藤岡生 松延好文
プラント・オパール分析 藤原宏志（宮崎大学農学部助教授）
調査担当 下村智 横山邦雄 浜石哲也（試掘調査）力武卓治 大庭康時
調査作業員 浅野多佳子 荒井君子 池田光男 井手口千方子 井手口美代子 伊東直樹
糸山英雄 上方高弘 江越初代 江見久利 人神嘉彦 入部茂久 大曲若江
緒方希 尾崎君枝 尾崎文枝 小田弘道 小畑良文 小淵ゆみ子 梶原チヨノ
梶原三治 加納雄三 川崎道子 川嶋美佐子 河野徹也 久良木和子 久良木
シズエ 久良木静恵 岸原藤雄 黒木静子 桑野正子 古賀博子 権藤利雄
白垣又五郎 末永とし子 杉田節子 杉野邦子 関加代子 関富美男 関政子
禪院忠生 高野皓代 竹原邦子 田中幸一 谷沢貴恵 塚崎賢一 徳永静雄
徳永ツチ子 徳永利久 徳永利秀 徳永秀臣 徳永道子 徳永通治 泊英司
鳥井勝則 中山スエノ 永松伊都子 永松咲江 永松トミ子 名平涼子 西本
スミ 西山卓哉 花畑照子 林田ユキノ 原田昌典 深沢美代子 藤原正一
増田弘子 松尾浩孝 松永武上 松村次郎 的野美津江 三浦力 溝口博子
実瀬祥子 村上エミカ 村上エミ子 村上キヨエ 村上八重子 村崎祐子 村
田喜代美 諸藤茂樹 安高久子 山口満 山崎光一 山村スミ子 杠真智子
吉原京子 臨坂正子 渡辺政彦

3. 遺跡の立地と環境

那珂久平遺跡は、福岡平野を北流する御笠川と諸岡川とにはさまれた沖積平野上に位置する。御笠川と諸岡川は、那珂久平遺跡の700mほど北西で合流するが、この間は『福岡市文化財分布地図 東部1』（福岡市教育委員会 1981）で、那珂深ヲサ遺跡群として周知せられた地点にあたる。那珂久平遺跡は、既に調査された那珂深ヲサ遺跡第1次・第2次・第3次調査地点、那珂君休第1次・第2次調査地点とともに、一連の生産遺跡群（水田跡）を構成している。

那珂久平遺跡の立地する沖積平野は、御笠川・諸岡川の氾濫によって形成されたものである。沖積平野を形成する堆積物は、約二万年前の阿蘇火山のカルデラ形成期に噴出した阿蘇IV火砕流による八女粘土層を基盤層としている。火砕流による堆積物は、大部分が白色粘土化した八女粘土層であるが、那珂久平遺跡の周辺にみられる中位段丘は、段丘上面を黄褐色軽石質火山灰（烏栖ローム層）がおおったもので、これら低丘陵上には、板付遺跡をはじめ諸岡遺跡群・那珂遺跡群などの集落遺跡が立地している。

板付遺跡は、弥生時代前期の環溝集落跡であると同時に、縄文時代晩期終末の水田址が検出されたことで著名である。板付丘陵の縁辺部に沿った西側の沖積面において、水路・取排水口を伴う夜臼I式期に遡る水田が検出され、ついで板付I式期には東側沖積面においても水田が営まれるようになる。D-7a区（南台地東南側沖積地）では、古墳時代前期の水田が検出されている。G-8a区においては、両側に側溝を持つ奈良時代の道路状遺構が検出され、この東西に水田が展開したと考えられている。また、古代～中世に関しては、E-5b区で12世紀以後の開田と考えられる水田遺構を検出している他、J-V-1～16区において、溝・杭列とともに土師器の高台付塊・青磁碗などが出土し、水田の拡がりが見込まれている。以上の様に、板付遺跡においては、縄文時代晩期終末以降、ほぼ継続して水田が営まれていたことがうかがわれるが、各調査が小規模なこともあって、水田規模を明らかにするには至っていない。

那珂深ヲサ遺跡は、諸岡川の西岸に位置している。古墳時代前期と中世の、二時期の遺構が検出されている。古墳時代前期では、第4号溝とそこに付設された柵状遺構が検出された。布留式併行期の柵状遺構は、全長16mをはかる。中世の遺構としては、12世紀後半以降の第3号溝と、第3号溝埋没後間もなく営まれた第2号溝と水田跡、それらが砂に覆われた後に整えられた第1号溝とそれに伴う水田跡が検出されている。水田を明確に区画する畦畔はみとめられず、水田規模もわかっていない。那珂久平遺跡との関連で特筆すべきは、第1号竪穴である。奈良時代後半期のおそらく井戸であろうと考えられている竪穴であるが、3個の墨書土器が出土した。2個は文字が判読できないが、須恵器の坏の外底部の文字は、「中寺」と読める。那珂深ヲサ遺跡の東南2,000mの地点に、8世紀中葉創建にかかる寺院址が検出され、高畑院寺



Fig. 1 周辺遺跡分布地図 (1/25,000)

1. 那珂久平遺跡 2・3 那珂君休遺跡 4. 那珂深ワサ遺跡 5. 諸岡館跡 6. 高畑院寺
 7. 栗野下古賀遺跡 8. 三筑遺跡 9. 井相田遺跡 10. 地祇神社遺跡 11. 那珂八幡古墳
 12. 剣塚古墳 13. 下月隈天神森遺跡
 A. 那珂深ワサ遺跡群 B. 那珂遺跡群 C. 板付遺跡 D. 諸岡遺跡群 E. 五十川遺跡群

と呼ばれている。高畑庵寺は、那珂郡衙推定地（那珂久平遺跡を含む那珂君休一帯）に近いこと^{註6}から、那珂郡の郡寺である可能性を指摘されている。「中寺」とは、この高畑庵寺をさすものと考えられる。ただし、那珂郡衙推定地については疑問もあり、那珂久平遺跡1号溝（条里溝）出上の河壁館式瓦とあわせて、第3章でふれることにする。

那珂君休遺跡第1次調査では、条里復元線の方向とほぼ一致した第2号溝が検出された。

那珂君休遺跡第2次調査は、那珂久平遺跡調査に半年あまり先行してなされ、^{註7} 时期的にも遺構の上からも密接に関連している。古墳時代と中世の水田面が検出された。古墳時代では、VI層において4世紀後半に属すると考えられる水利遺構がみとめられ、V層では、5世紀前後の水田面と占河川を検出することができた。V層水田址は、その標高・形態から3類に人別されているが、それについては、那珂久平遺跡との関連から、後章で論じることにする。中世の水田面は、上・下2面に区別されている。水田規模を明らかに知りうるものはないが、上面水田には相対的に大小2種類の区画が認められるという。両面とも时期的には殆んど差がなく、12世紀以降に営まれた水田址である。

これら生産遺跡にかかわる集落遺跡は、いまだ明らかではない。板付遺跡においては、縄文時代晩期終末から弥生時代前期の集落変遷が明らかにされているが、それ以降については成果をあげるに至っていない。おそらく、沖積地をひかえる中位段丘上（低丘陵上）に集落が存在したと考えられる。板付遺跡・諸岡遺跡群・那珂遺跡群・五十川遺跡群などが、これにあたるであろう。諸岡遺跡群の調査は、1972年以来断続的になされてきたが、先土器時代から中世にいたる遺構が検出されている。那珂遺跡群・五十川遺跡群については、いまだ調査例が少なく不明な部分が多いが、弥生時代以降については、人間の営みをみることができる。

註1.『板付周辺遺跡調査報告書(8)』福岡市埋蔵文化財調査報告書第83集、1982

註2. (同上)

註3. (同上)

註4.『板付一市宮住宅建設にともなう発掘調査報告書一』

福岡市埋蔵文化財調査報告書第35集、1976

註5.『那珂深ヲサ遺跡Ⅰ』福岡市埋蔵文化財調査報告書第72集、1981

『那珂深ヲサ遺跡Ⅱ』福岡市埋蔵文化財調査報告書第82集、1982

註6.『板付周辺遺跡調査報告書(9)』福岡市埋蔵文化財調査報告書第98集、1983

註7.『那珂君休遺跡』註5.『那珂深ヲサ遺跡Ⅱ』所収

註8.『那珂君休遺跡Ⅱ』福岡市埋蔵文化財調査報告書第106集、1984

第二章 発掘調査の記録

1. 発掘調査の概要と経過

前述した様に、当初6ヶ月間を予定して5月27日に開始された発掘調査は、最終的には尙1959年1月26日までの丸8ヶ月を要する調査となった。

調査を実施するにあたり、試掘調査及びプラント・オーバーホール試料採取時に設定されたグリッドを踏襲し、10m方眼のグリッドを道路方向と一致させて設定しなおした。この道路方向は、推定条里方位とほぼ一致している。ただし、グリッドの呼称は改め、西南から東北へA・B・C……北西から南東へ1・2・3……とし、両者を組みあわせてA-1区、A-2区という風に呼ぶこととした。

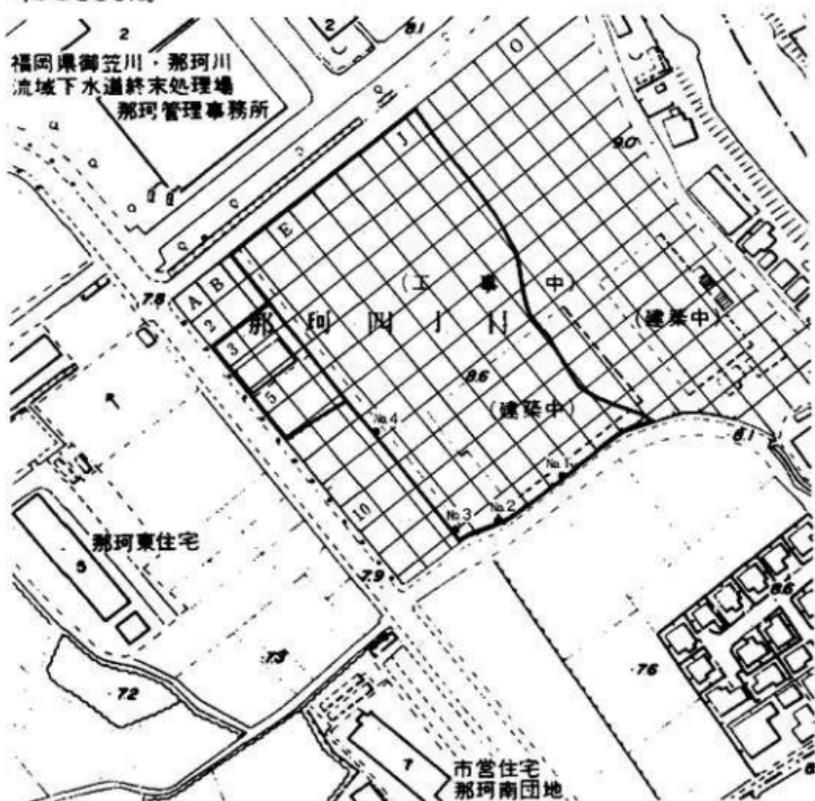


Fig. 2 調査地点図 (1/2,000) №1～4は土層柱状図の番号

試掘調査の結果から、申請面積17,929㎡の内、ほぼ中央を縦貫する水路の東側については、遺構の状態が悪い、または検出が困難であるなどの点から、調査対象地からはずした。

発掘調査は、南西隅からユンボで表土を削いで、上層水田面を覆う砂層を検出し、その後、手掘りで水田面を調査するという方法をとった。この間、隣接する民有地で開発計画がもちあがり、7月1日地主と協議をもち、7月4日から併行して調査にはいった。

水田面では、人や牛の足跡が夥しく残り、那珂河君休遺跡の経験から、航空測量を行なうこととした。この年は雨に祟られ、現場が冠水することも数度を数えた。8月10日ようやく上層水田面の空掘を終了し、ほり下げにかかった。

当初、水田面は上・下の2枚と考えられていたが、この間に部分的に遺構面が介在することが観察できた。それは、民有地と学校用地北半においてよく残っていた。明らかに水田面を検出した訳ではないので、中層遺構面と仮称している。

下層水田面の調査にとりかかったのは、9月22日である。下層水田面では、畦畔で区画された43枚の水田と、調査区を東から西へ流れる河川跡が検出された。この河川跡から、さし渡し30mにも及ぶ弥生時代後期の堰が検出されたのは、12月に入ってからであった。折からの積雪と湧水の中で堰の実測・解体を行ない、すべての調査を終了したのは1月26日。次の現場への移転も完了し、プレハブの仮事務所に戻っても何ひとつないという慌しい終幕であった。



(1) 上層水田址発掘調査風景



(2) 下層水田址発掘調査風景



(3) 井堰遺構発掘調査風景

2. 基本層序

水田部分の調査がほぼ終了した段階で、調査区域西南辺に2ヶ所、東南辺に2ヶ所の4ヶ所で十層柱状図を作成した。以下、上層の特徴について述べる。

I層 現耕作土

IIa層 現耕作土の床土 黄茶色土

IIb層 砂層 柱状図 No.1 では灰茶色土層

IIIa層 灰褐色粘質土層 中世水田面である。今報告では上層水田址と呼ぶ。

IIIb層 暗灰褐色粘質土層 IIIa層と比べると、砂がまじる。

IV層 砂層 砂の堆積の状況によって、数層にわけられる。調査区北半では、この層の幅の中で遺構面が検出されている。中層遺構面と仮称する。

Va層 灰黒色粘質土層 古墳時代水田面である。下層水田址として報告する。柱状図 No.2 では粗砂がまじり、足跡も重複してみられる。後述する様にここは最も低い水田にあたり、すべての排水はこの水田に集まる。砂がまじるのはそのためであり、水田の作りかえが度々行なわれたと思われる。

Vb層 灰黒色粘質土層 柱状図 No.2 では足跡が残る。水田面と考えられる。

VI層 黒色粘質土層 色の濃度の違いから2~3層にわけることができる。

VII層 青灰色粘土層 還元化した八女粘土層と考えられる。標高から考えて、VII層の上面に弥生時代の水田が営まれた可能性がある。

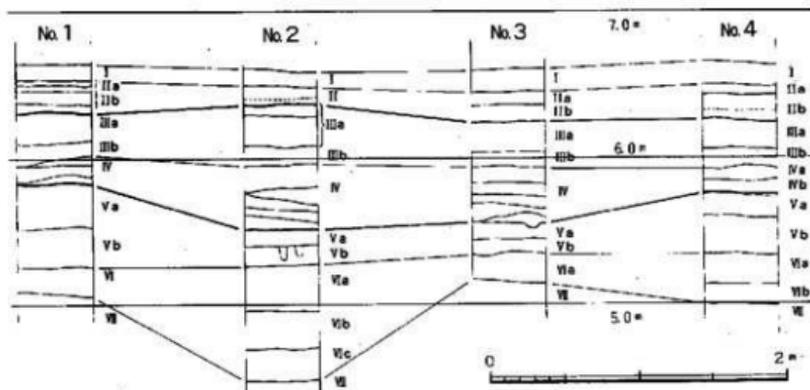


Fig. 3 土層柱状図 (1/40)

3. 上層水田址

現地表面下40cm前後(標高7.1~7.4m)で検出された水田面である。現地表面に営まれている水田の床土を剥ぐと、砂の堆積があらわれる。おそらく御笠川の氾濫で押し流されてきたのであろうこの砂層に覆われて、上層水田址が存在する。

プラント・オパール分析の結果では(付論参照)、調査区のほぼ全域で上層水田址を検出できると予想された。また、発掘調査時の所見でも上層水田址は調査区全域に拡がると思われたが、水田址の上に堆積している砂層の有無・厚薄によって、検出できない部分があった。D~J-2~6区において検出不可能であった。また、E-7・F~J-7~8区においても砂が薄く、検出は困難で、多少掘り過ぎもしくは掘り足りない部分があると思われる。

水田址の土壌は、灰褐色粘質土であるが、その有り方は一律ではない。E-13区あたりでは、足跡を検出した灰褐色粘質土の下に、うすくアズ状の砂質土がかんでいる状況がみられた。また、E~G-7~8区では、灰褐色粘質土に粗砂がまじり、数層に分離できそうな部分もある。これらの状況は、上層水田面が水田として繰り返し使用されたことによると思われる。生産遺跡である以上、いわば当然であるが、調査の結果同一面として扱っている水田面が、必ずしも単一の上層で耕作されていたのではなく、ある部分は繰り返し耕された結果砂まじりの粗いものになり、またある所は水田の土壌の少し下にうすく砂層がのびているという状況にあった訳で、収穫量などに影響を与えたこともあろうと思われる。

畦畔の遺存は、きわめて悪かった。畦畔が検出できたのは、D-5区でN-51°41'Eのものが8m分、C~D-11区で同じく5.6m分、E-9区でN-48°30'Eのものが9m分、E-11区で東西方向にゆるく弧をえがくものが11mにわたってのびていたにすぎない。C~D-11区の畦畔は、E-11区の畦畔につながるとみられ、畦畔の切れている部分は北西側にのみ段落ちがみられる。またE-11区の畦畔の東北端から東南方向にはほぼ直角に曲って、西南方向の段落ちがみとめられる。E-11区の畦畔の東端部と30cmほど離れて西南方向の段落ちが始まり、西北方向にのびてE-9区の畦畔の東端にとりつく。これらの畦畔は、幅60cmから100cm、高さ6~10cm程度のカマボコ形あるいは隅丸台形の断面形を示すものである。

以上の様に、遺存していた畦畔からは水田区画を復元するのは困難である。そこで、水田面に残された足跡から水田区画を考えると、経験的に、水田面に足跡が集中し畦畔上には足跡はあまりみとめられないという点が指摘されている。足跡の検出状況は、それを埋めている砂の有無などに左右されるが、比較的良好に検出できている地点を中心に考えると、10枚の水田が復元できる。大体の面積が推定できるもので、水田址⑤で110㎡程度、水田址⑥50㎡程度、水田址⑦で110㎡程度、水田址⑧で320㎡程度が考えられる。

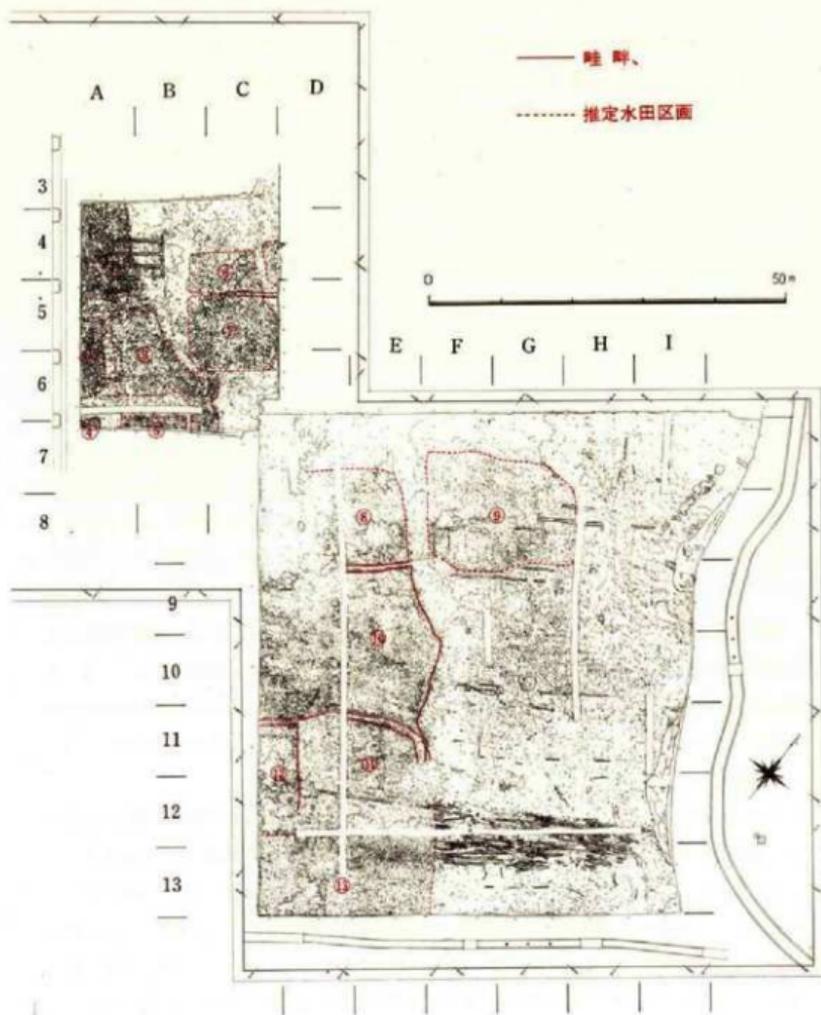


Fig. 4 上層水田址遺構実測図 (1/800)

その他、先述した畦畔から、区画云々は別として、とにかく存在が考えられる水田址は、水田址⑩～⑫の3枚である。以上の13枚の水田址をみると、小区画なもの（水田址②・③・⑤～⑦等）と、比較的面积の広いもの（水田址⑨・⑩等）がみとめられる。また、水田址の区画はほぼ方形で、その方位は、遺存する畦畔から推定すると、現在の水田区画・地割りの方位と一致し、推定復元されている那珂郡の条里方向とも重なるものである。

F～H-12～13区では、溝状を呈する遺構が10条前後平行してみとめられ、畑地である可能性が指摘されている。溝は砂で埋めつくされ、側面は抉り込まれた様な形状を示している。遺物も水田部分に比べて多く出土している。おそらく、洪水等で畝にそって、水流が走り、畝を抉りこんでいったものと思われる。遺物も周辺の遺跡から水に押し流されてきて、畝にひっかかったものであろう。ただし、もしこの畝状遺構を1枚の畑地もしくは休耕田利用のものとする、その農地の一辺は少なくとも28m以上に及び、上で推定した水田址の規模と比較して、ひときわ大きなものとなる。

以上の他に、幅30cmから50cmほどの細い溝が16～7条方位を畦畔の方向にそろえて検出されている。これらの小溝の埋土は灰褐色砂質土で、上層水田址を覆う砂とは区別できる。また、灰褐色砂質土と水田址にまたがって足跡が検出されている箇所もあり、上層水田が営まれた時点で小溝は埋っていたことがわかる。また、小溝は推定される水田区画をまたがって検出されており、水田に伴うとは考え難い。上層水田址に先行する遺構であると思われる。

上層水田址の時期は、遺物が極めて少なく限定しかねる。下限については、上層水田址出土の遺物中に染付が一片も含まれていない点から、15世紀代に求めることができよう。一方、上層水田面から土層確認用に入れたトレンチの出土遺物（Fig. 8）をみると、13世紀中頃の遺物も含まれている様である。よって、13世紀後半以降15世紀以前と考えて人過あるまい。

出土遺物 Fig. 5～6, PL. -49

上述した様に、上層水田址から出土した遺物は少なく、時期も縄文時代晩期の夜叉式土器片から陶磁器に及んでいないので、上層水田址を覆う砂層出土の遺物も併せ述べることにする。

Fig. 5 に示したのは、砂層（柱状図 II b 層）出土の遺物である。1 は、弥生時代中期の甕の口縁部である。胴部から口縁部にかけて内傾し、口縁部はT字状につくる。口縁部には、断面三角の突帯を一条巡らせる。磨滅しているため、器壁の調整はうかがえない。胎土には小砂粒をまじえ、焼成は普通で、淡灰褐色を呈する。口径は、内径で26cm、外径で34.9cmをはかる。2 は、弥生時代中期の袋状口縁壺の口縁部である。口縁部は丸味を持ち、稜線はみとめられない。ローリングを受けたためか、器壁は磨滅している。胎土は砂粒を多く含んで粗い。焼成は普通で、茶色を呈する。口径は9.6cm、袋部の径は13.2cmをはかる。3 は、須恵器の高台坏であ

る。底部を欠く。口縁部は、ゆるく外反する。器壁外面は磨滅しているが、内面にはヨコナデ調整の痕跡がみとめられる。微砂をまじえた胎土で、焼成は普通である。色調は暗灰色。小片であるが、口径10.6cmと推定される。4も、須恵器の高台杯の破片である。体部はほぼ直線的にのび、口縁部で小さく外反する。胎土には微砂をわずかにふくむ。焼成は普通、暗灰色を呈する。ローリングをつけ、器壁が磨滅している。口径14.6cmに復元できる。5は、須恵器の広口壺または壺の口縁部である。全体は、ヨコナデ調整によって整形されている。胎土は精良で、焼成も良好、暗褐色を呈し表面にはテリがみとめられる。小片である。口径22.6cmと推定できる。6は、白磁の平底皿の破片である。全体の4分の1弱をとどめる。見込みには、片切彫の刺花文が施されている。灰色の胎土に、灰緑色の半透明の釉がかかり、外底部は露胎となる。口径9.6cm、底径3.8cm、器高2.0cmをはかる。7は、白磁碗の破片である。口縁部は、玉縁状につくる。白色の胎土に、乳白色の釉がうすくかかるが、体部外面は口縁の直下から露胎となっている。小片であるが、口径15.4cmと推定される。

Fig. 6は、上層水田址出土の遺物である。このうち、9・10・14~16が袋状溝構出上遺物にあたる。8は、弥生時代中期の小型壺形土器である。ローリングを受けている為、器壁の調整はうかがえない。胎土には、径1.5mm大の砂粒を含む。焼成は普通で、茶褐色を呈する。口径は、11.7cmをはかる。9は、弥生時代後期の袋状口縁壺の口縁部破片である。袋状溝構出上。器壁は全体に磨滅しているが、口縁部下にナナメ方向のハケ目をわずかにとどめている。袋状口縁部は、鋭い稜をつかって「く」の字状に折れる。胎土には人小の砂粒を多く含む。焼成は普通

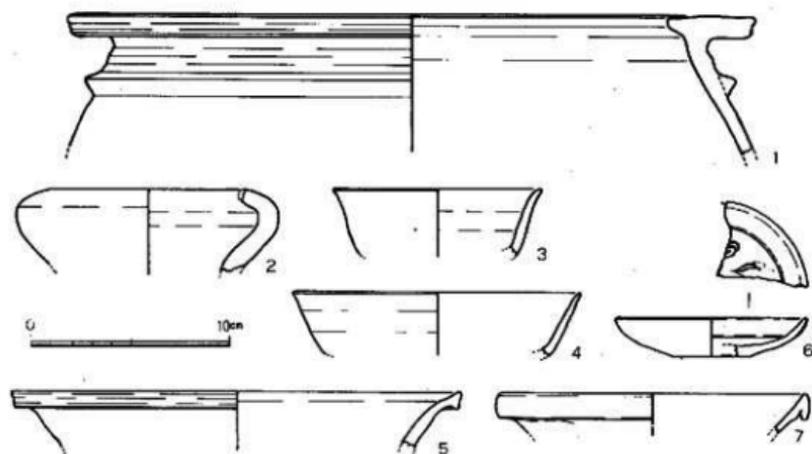


Fig. 5 11b層出土遺物 (1/3)

で、茶色を呈する。口径は12cm、袋状口縁部の最大径は14.4cmをはかる。10は、弥生時代中期の壺の鈎状口縁部である。畝状遺構より出土。胎土には径0.5mm大の砂粒を多く含むが、焼成は堅緻で、赤褐色に焼き上っている。器壁表面は磨滅している。小片の為、口径その他は推定できない。11は、弥生時代前期の甕の口縁部である。口縁部は、ゆるく外方にひねり出している。口縁部下に、沈線が一条巡る。胎土は、径2mm大の砂粒を多く含む、径4~5mm大の粗砂粒も若干含んでいる。焼成は普通で、外面茶色・内面淡灰褐色を呈する。口径24.5cmをはかる。12は、弥生時代中期の甕の口縁部である。胎土には、径1~1.5mmの砂粒を含み、焼成は普通で、茶色を呈する。器壁は磨滅している。口径23.8cmに復元できる。13は、弥生時代中期の甕の口縁部である。体部は直線的にのび、逆L字形の口縁部をつくる。器壁は、ローリングをうけ、磨滅している。径0.5~1mmの砂粒を多く含む。焼成は普通で淡茶色を呈する。口径は、25.4cmと推定される。14は、弥生時代後期の器台形上器である。上部を袋状につくる。胎土には粗砂を多く含む。焼成はやや甘く、白褐色を呈する。口径20.5cmをはかる。器壁は磨滅し、調整痕は全く認められない。畝状遺構の出土である。15は、土師器の甕の把手である。指先で押さえて整形している。畝状遺構から出土している。16は、土師器の高台杯の底部片である。高台は付け高台で、体部が立ち上がる屈曲部につけられている。ローリングをうけているため調整痕は認められないが、体部にみとめられる稜線からして、ヨコナデ調整が施されていると思われる。胎土には、径1mm大の石英粒を多く含んでいる。焼成は甘くやや軟質に焼き上がり、茶色を呈する。高台径は、9.2cmをはかる。畝状遺構出土。17は、須恵器の壺である。おそらくは、短頸壺の蓋であろう。作りは、薄手で丁寧であり、端部もほぼ直角に折り、先はすどくおさめる。内面頂部付近にナデ調整がみられる他は、ヨコナデ調整が施されている。胎土には微砂粒をふくみ、焼成は普通、暗灰色を呈する。小片だが、径9.6cmをはかる。18は須恵器の坏蓋である。端部を欠く。外面は、宝珠つまみを含めてヨコナデ調整がなされる。内面は、中央部付近はナデ調整、その他はヨコナデ調整で整形される。胎土は、わずかに砂粒を含むものの全体に細かく整い、焼成は普通で青灰色を呈する。19は、須恵器の高台杯である。体部は直線的に立ちあがる。高台は付け高台である。内面と体部外面は、ヨコナデ調整がなされ、高台内の外底部は、ヘラ切りの痕跡をとどめている。胎土には、径1mm弱の砂粒をとどころに含んでいる。焼成は普通で、外面暗灰色・内面灰色を呈する。6分の1弱の破片であるが、口径13cm、高台径8.2cm、器高4.1cmが推定される。20は、須恵器の壺の口縁部である。器内は、厚いところでも5mm程度しかなく、薄手につくられているといえる。ヨコナデ調整がなされている。胎土には、径2mm大の砂粒をわずかに含む、焼成は普通で灰色を呈する。小片のため、口径等は推定できない。21は、須恵質土器の鉢である。内・外面ともヨコナデ調整がなされる。胎土は砂粒を含み、全体に粗雑な感がある。焼成は普通であるが、胎土が粗いため、器壁はガラザ

ラとしてあらい。暗灰色を呈する。小片のため、口径は不明。22は、青磁の合子の蓋の破片である。淡緑灰色で透明度の強い釉が、全面にうすくかけられる。端部は平坦につくるが、重ね焼きの日痕が残っている。小片のため、日痕の数は推定できないが、比較的近接して2つ残っている。胎土は灰青色である。推定径は、11.4cmをはかる。23は、越州窯系青磁碗の底部片である。緑がかったくすんだオリーブ色の半透明の釉が、内面にかかり、外面は露胎部分のみである。見込みには、重ね焼きの目痕がつく。胎土は、濃灰色の非常によくつんだ土である。3分の1弱の破片であるが、高台外径は7.2cmをはかる。

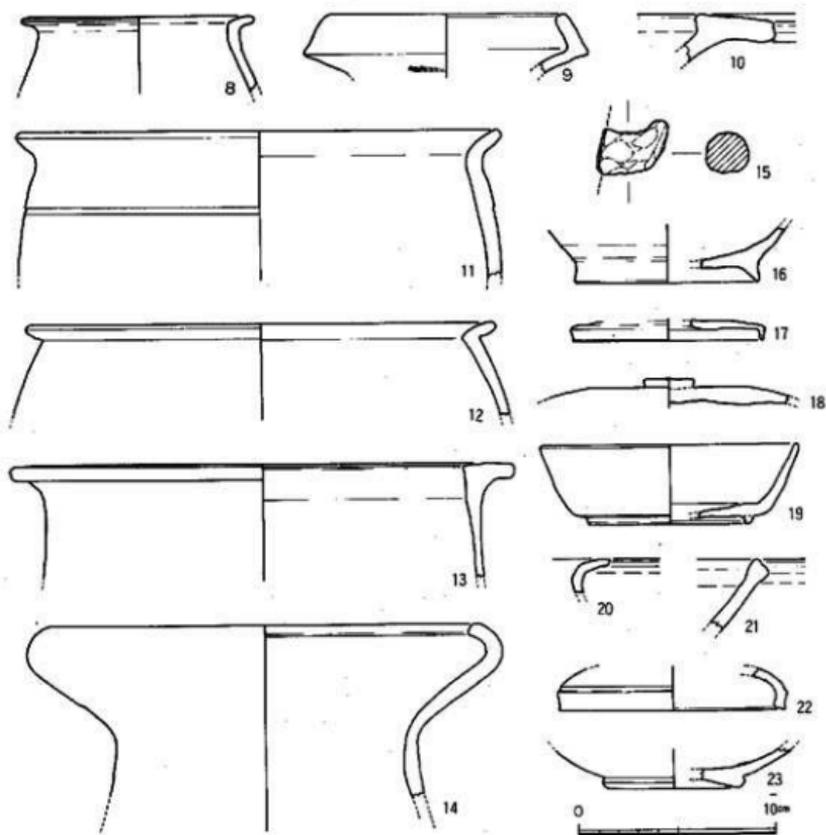


Fig. 6 上層水田址出土遺物 (1/3)

4. トレンチ及び、トレンチ出土遺物

上層水田址の調査を終了した段階で、上層水田の水田土壌の有り方、上層水田址と下層水田址の間の遺構の有無を確認するため、10本のトレンチを設定した。調査を開始した時点で、調査対象区外東側にいたトレンチ (Tr-11)、第3号溝の土層観察のため設定したトレンチ (Tr-22・23) を含めると、計13本のトレンチを試掘調査時のトレンチとは別に設けたことになる。Tr-13~15では、上層水田址と下層水田址との間に、溝群を中心とする遺構面が確認された。

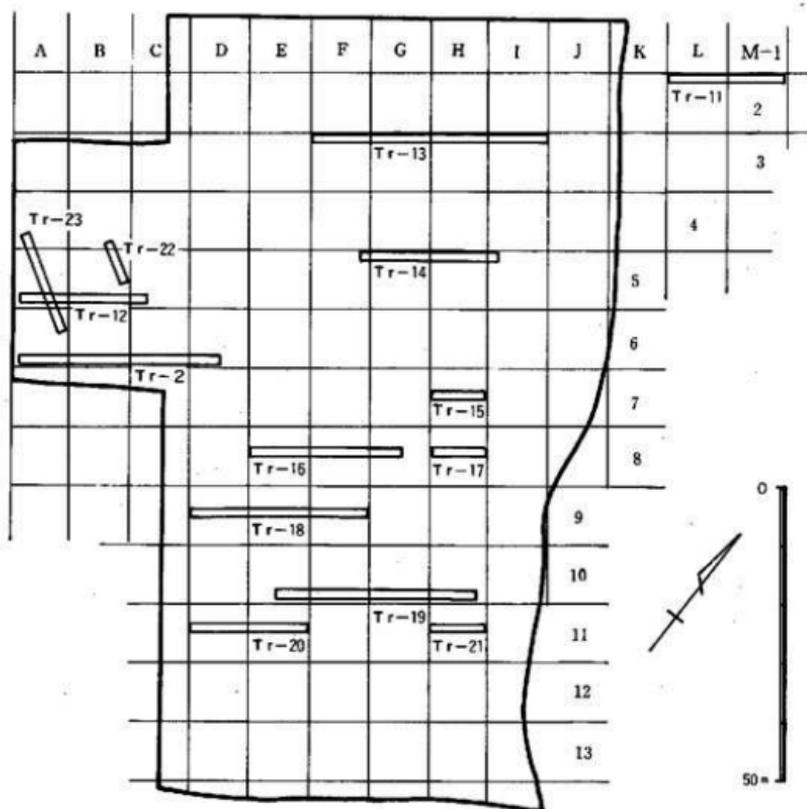


Fig. 7 トレンチ配置図 (1/1,000)

同時に、この地点は旧河川と旧河川の堆積物である砂が、中層遺構面の下層を形成していることがわかった。すなわち、下層水田址がこの地点に存在したとしても、それは旧河川が作った自然堤防上に営まれたもので、上層観察では明らかな水田十壌は認められず、一時的かつ不安定な水田であり、発掘調査によって面的に把握することは不可能であると判断したのである。これに対し、Tr-18~21では、下層水田址を確認することができたが、中層遺構面はみとめられなかった。Tr-2・19では、試掘調査の結果下層水田面で認められるとされた旧河川の西岸が、実は下層水田面の埋没後に形成されたものであることを確認した。

出土遺物 Fig. 8・9, PL-50

トレンチの出土遺物は、一括して述べる。なお、出土トレンチについては、実測図にトレンチ番号を併記している。

24は、土師器の高台杯である。体部と底部の境に高台がつけられてはいるが、底部中央の方が下に垂れ、高台は用をなしていない。体部は直線的にひらき、そのまま口縁をつくる。内底部はナデ調整されるが、体部内面から外面はヨコナデ調整される。胎土は、径1mm以下の小砂粒を含んでいる。焼成は良好で、淡褐色を呈している。口縁部は、内・外面とも黒変している。ほぼ完形でTr-13から出土した。口径14.8cm、高台径7.1cm、器高6cmをはかる。Tr-13の砂層からは、他に曲物片・木椀片も出土している。25は、Tr-19出土の瓦器碗である。体部外面は、

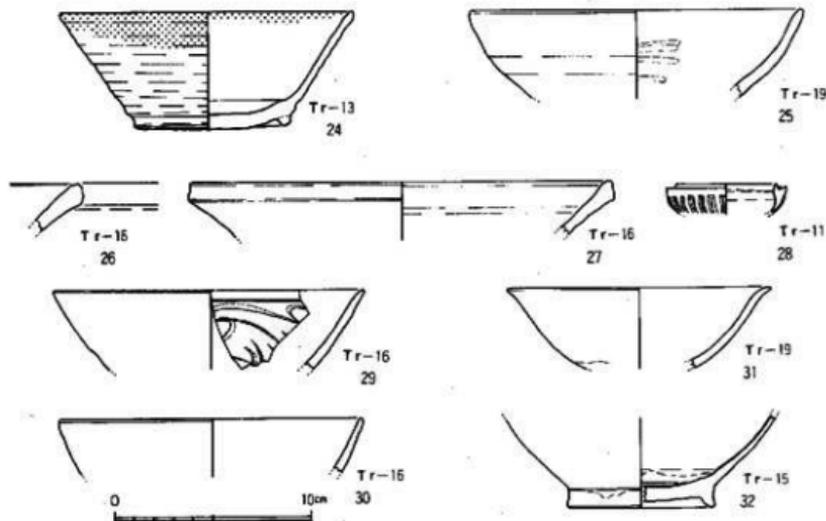


Fig. 8 トレンチ出土遺物1 (1/3)

ヨコナデ調整が施される。内面には、あらいへらミガキが部分的にみとめられる。胎土は灰白色を呈し緻密であるが、焼成はやや甘い。黒灰色を呈する小片で、口径17cmと推定できる。26・27は、Tr-16出土の須恵質土器の鉢である。26の口唇部及び口縁部下には、重ね焼きの痕跡がみとめられる。口縁部は、黒藍色の光沢を持つ自然軸がかかる。胎土は粗く、淡青灰色を呈する。27は、21.2cmの口径が推定される。胎土には若干の砂粒を含み、灰色を呈する。26・27ともヨコナデ調整が施される。28は、白磁で合子の身である。Tr-11出土。やや緑色がかった透明の軸が、灰色の胎土にかけられている。受け部と受け部内面は、露胎である。体部には、へらで縦方向の刻みがつけられている。小片であるが、口径5cmと推定される。29は、Tr-16出土の青磁碗片である。龍泉窯系であろう。体部内面に、片切彫の劃花文が施される。灰白色の胎土に灰緑色の透明な軸がかかる。口径15.6cm、30もTr-16出土の青磁碗である。灰黄緑色の透明な軸が白色の胎土にかけられている。口径15.2cm。31は、Tr-19出土の白磁碗片である。体部外面の底部近くは露胎になる。体部はゆるく内湾しながら開き、小さく外反して口縁をつくる。うすく緑色をおびた白濁した軸が、灰白色の胎土にかけられている。口径は、13.4cmをはかる。32は、Tr-15出土の白磁碗の底部である。高台は、やや外反して張り出す。白濁した透明の軸が、白色の胎土にかかる。見込みは、輪状に軸をかきとる。高台から底部にかけては露胎となる。高台径は、7.6cmと推定される。33は、弥生時代後期の壺の口縁である。内面は横方向の粗いハケメ、外面は縦方向の細かいハケメ、口縁部はヨコナデによって整形されている。胎土は微砂まじりで、焼成は普通。淡灰褐色を呈する。Tr-15出土。34は、弥生時代中期の壺である。口縁上面から体部外面は、丹塗りをとどめている。内面の調整は、ヨコナデである。胎土は精良でよく整っている。焼成は普通で、褐色に焼きあがる。口径14.5cm。Tr-23出土。35は、Tr-12出土の弥生時代中期の壺の口縁である。ローリングを受けている為、器壁は磨滅し、調整はうかがえない。胎土には細かい砂粒を多く含む。焼成は普通で、外面は淡暗褐色、内面は褐色を呈する。口径は、内径で24.4cm、外径で30.4cmをはかる。36は、Tr-15出土の弥生時代中期、おそらく壺形土器の底部である。全体に器壁は磨滅している。胎土は、わずかに砂をまじえ、焼成は良好。淡褐色を呈する。底径10.5cm。37・38は、弥生時代終末期から古墳時代初頭にかけての土器である。37は、Tr-15出土で、直立する口縁の付け根の部分に断面三角形の突帯を巡らしている。体部外面はヨコナデ調整で仕上げる。内面は、口縁部でヨコハケ、肩部でタテハケ胴部でナナメハケと部位ごとにハケメの方向が異なり、口縁部と肩部の継ぎ目は、細かく指でおさえしている。砂粒をわずかに含む胎土で、焼成は普通。淡褐色を呈する。口径は9.4cm。38は、Tr-16の旧河川埋土である砂層より出土した(PL15)。体部外面上半は細かいタテハケで、下半部ではそれをナデ消している。口縁部外面と口唇部はヨコナデ。口縁部内面は、粗いヨコハケ。体部内面上部は粗いタテハケで、中位から下では縦方向のナデで消している。内底

部には指押えの痕跡をとどめ、外底部はナデで指の圧痕を消す。胎土には、径1~2mmの砂粒を多く含む。焼成は普通で、淡灰褐色を呈する。口径14.6cm、胴部最大径25cm、器高30.5cmをはかる。39は、Tr-11出土の石織である。黒曜石製。縁辺部を除いて、ローリングのため剝離痕がみとめられない。長さ2.2cm。

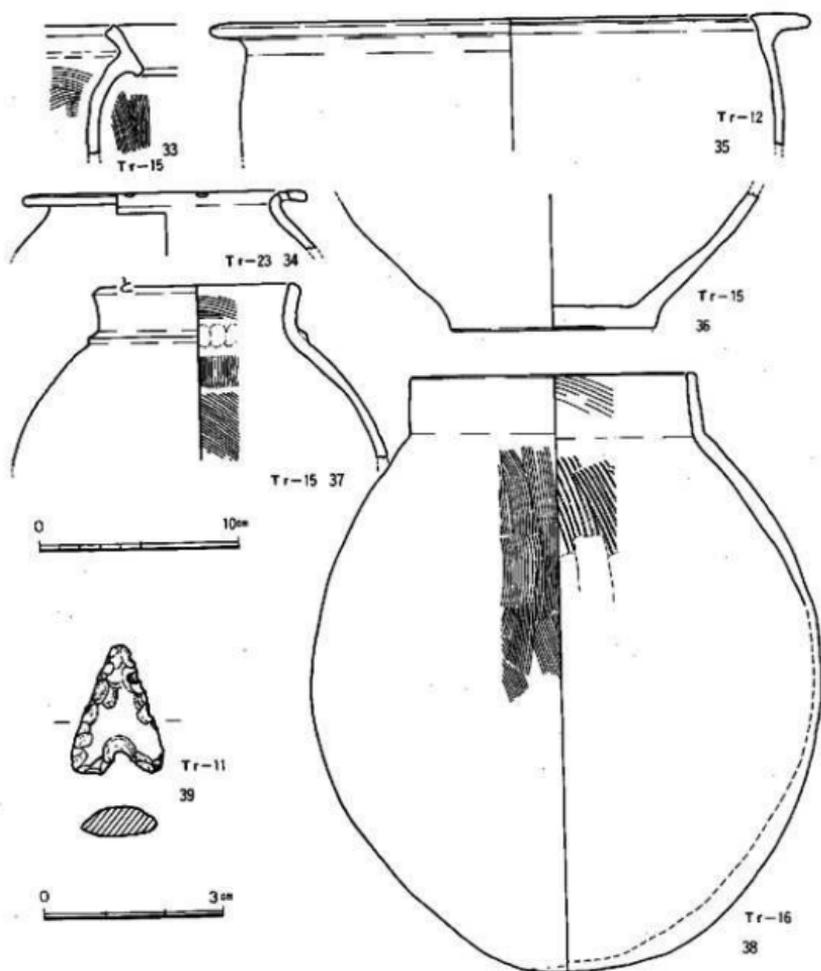


Fig. 9 トレンチ出土遺物2 (1/3・1/1)

5. 中層遺構面

前述した様に、試掘調査の結果は上層水田址と下層水田址に重点がおかれていたが、上層水田址の調査が付いた段階でトレンチを設定し、中層遺構面を確認した。あえて中間の遺構面をさがしたのは、この那珂久平遺跡一帯が、古代の那珂郡衙の所在地であると推定されているからである。中層の遺構は、民有地部分であるA-B-3~6区とG-1-3~7区で検出されたが、民有地部分の遺構については第1号溝・第2号溝・第3号溝として後でふれるので、ここではG-1-3~7区において調査した溝群について述べることにする。

検出したのは、全部で13条の溝である。また、遺構面は上層や下層の水田址とは異なり、砂の堆積がみられる訳ではなく、溝の埋土である砂を指標にして面としておさえたにとどめる。したがって、それぞれの溝のほりこみ面は失われている。溝は、主として北西-東南の方位をとるが、切り合い関係から、少なくとも4時期にわかれることがうかがわれる。最も古い溝は、Fig.10の溝⑬である。溝⑬は、中層遺構面において、溝の一部の埋土がみつめられたので、その埋土である粗砂を追って全体を明らかにした溝で、他の溝がのっている中層遺構面から10~20cm下層で検出すべき溝であった。また、那珂郡の推定条里の方向にあわせて一直線に穿たれている溝で、断面形もひとときわ深くはっきりとしている。これらの点から、①から⑬までの中層遺構群の溝とは、性格・用途を全く異にすると思われる。溝①~⑬は、一般に浅く(10cm前後が多く、深いもので15cm程度)、形状もうねうねと蛇行している。また、溝の掘りこみ面を失っている為もあるだろうが、途中でとぎれてしまうものが多い。以上を考えると、取水・排水等の目的で意図的につくられた水路とは異なる様に思われる。

中層遺構検出面は、標高7m前後であるが、溝⑬から南西側で灰色砂質土、北東側で暗灰褐色粘質土となる。この暗灰褐色粘質土には、畦畔・足跡等は全くみられなかったが、鉄分やマンガン分の斑点が部分的に認められ、水田土壌の可能性も考えられる。Tr-13の十層観察によれば、暗灰褐色土層の厚さは10~20cmで、その下層は砂質土が厚く堆積している。この砂質土は、G区中程で大きな落ちこみを示す砂層に切られる。この落ちこみは、F区で立ちあがり、幅9m程の川と思われる。すなわち、大規模な旧河川または旧河川の流路変化にともなって堆積した砂質土層が厚く存在し、旧河川は幅9m程の小川に姿を変えF~G区を流れていた。この小川が埋没したあと、暗灰褐色粘質土が砂質土全体を覆ったことになる。溝⑬の南西側でみられる砂質土は、暗灰褐色粘質土下の小川の埋土であろう。なお、小川は一度幅を7mに減じ、最終的には1.2mの流路にまで衰えたことが確認できている。

中層遺構面におそらく水田が営まれたであろうことは、十分に推測できる。中層遺構面で検出した10枚の溝状遺構も、この水田経営との関わりで考えるのが適当であろう。

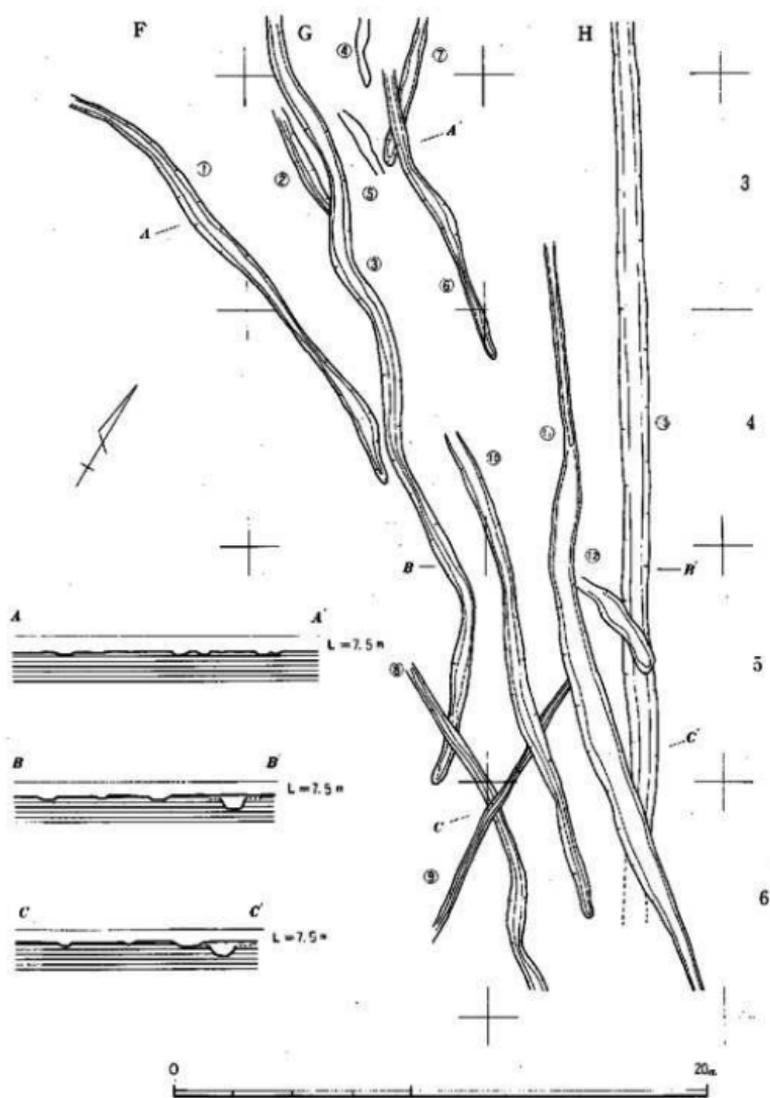


Fig.10 中層遺構面遺構実測図 (1/250)

出土遺物 Fig.11. PL.51-(1)

中層遺構面出土の遺物は、量的に決して多くない。また、溝状遺構出土遺物も細片にとどまる。図示できたのは、5点のみである。

40は、弥生時代後期の器台形土器の脚部である。器壁はすべて磨滅して、調整はうかがえない。胎土は、径3mm以下の砂粒を多く含む。焼成は普通で、茶色を呈する。脚部の径は、9cmと推定される。41は、土師器の甕である。H-4区の溝⑩と溝⑪の間で、遺構検出面直上より出土した(PL.16-(2))。ローリングを受けていて、器壁は磨滅し部分的にハケメがみとめられるのみである。胎土には小砂粒が多くまじる。焼成はややあまく、明褐色に焼きあがる。口縁部の遺存が悪いため、頸部で径を測定し実測している。実測网上で、口径15.8cm、胴部最大径25.5cmをはかる。42は、須恵器の蓋坏である。受け部の立ち上がりは大きく内傾するが、ゆるく外反して端部をおさめる。整形は、ヨコナデ調整によってなされている。小砂粒まじりの胎土で、焼成は普通。灰色を呈する。小片からの復元であるが、口径10.3cmを推定することができる。43は、須恵器の坏の口縁部である。底部は残っていないが、おそらくは高台坏であろう。器壁はローリングを受け磨滅し、調整痕をとどめていない。胎土は精良で、焼成は普通、灰色を呈する。小片であるが、口径10.4cmと推定される。44は、須恵質土器の底部付近の破片である。高台は、断面台形で、底部と体部との境に付く。内底部はナデ調整、その他はヨコナデ調整である。胎土には径1mm程度の砂粒を多く含む。焼成は良好で重い。内面は茶色、外面は灰褐色を呈する。高台径6cm。

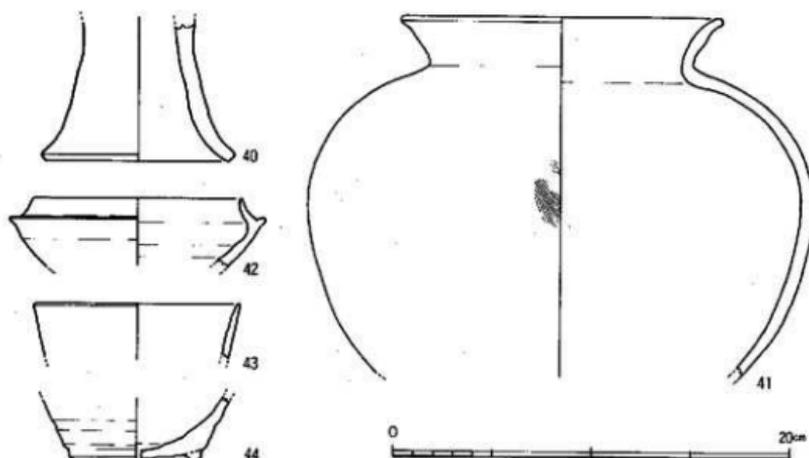


Fig.11 中層遺構面出土遺物 (1/3)

6. 第1号溝・第2号溝・第3号溝

民有地調査部分であるA～C-3～7区において、中層遺構面から下層遺構にかけて、条里遺構と考えられる第1号溝、それを切って斜行する第2号溝、南から北流して旧河川につながる第3号溝（川跡）が検出された。

(1) 第1号溝 Fig.12 PL.18～21

B-3～6区を縦断する溝状遺構である。幅2.4～2.7mで、延長39m分を検出している。深さは、35cmをはかる。方位は、N-42°-Wを示し、那珂郡の条里方向であるN-37°-Wに近

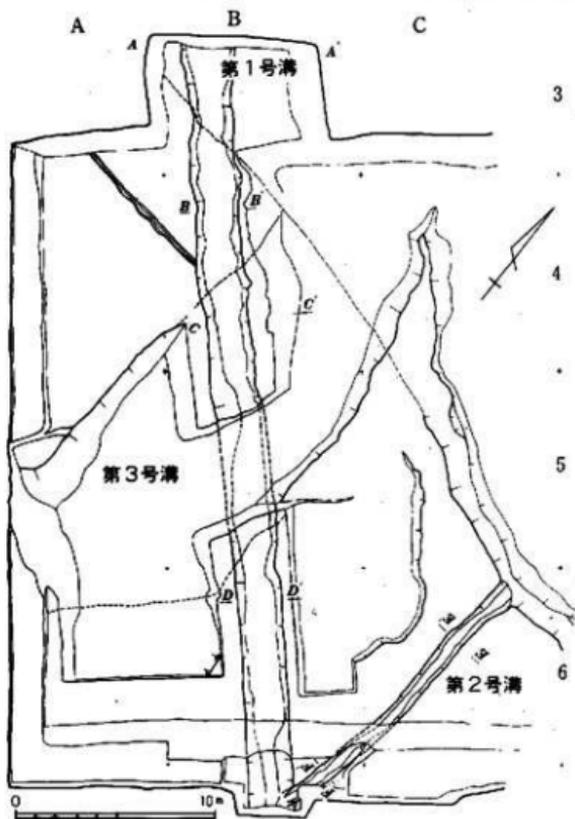


Fig.12 第1号・2号・3号溝遺構実測図 (1/300)

似する。溝の断面形は、大体U字形を示すが、
3 台形状を呈する部分もみとめられる。

以下に、土層の堆積について略述する (Fig. 13)。① 耕作土 (表土)。②・②' 床土。③ 茶褐色粘質土。この上面が、上層水田面である。④ 暗茶褐色土。わずかに砂粒をふくむが、粘性は強い。⑤ 褐色砂層。⑥ 黒褐色砂層。わずかにブロック状の粘質土を含む。⑦ 褐色砂層。⑧ 白色砂層。⑨ 白色砂層。⑩ 灰色砂層。やや粘性を持つ。

以上①～⑩までは、民有地調査区の北壁で土層を実測したものである。

第1号溝では、更に3

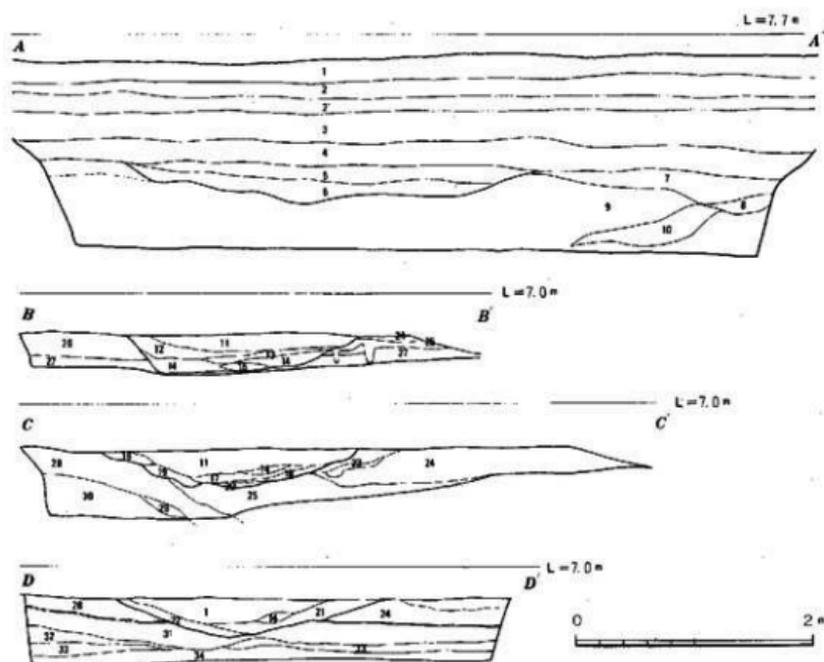


Fig.13 第1号溝土層断面実測図 (1/50)

ヶ所で上層を実測しているの、それらを通して略述する。① 暗茶褐色粘質土。② 暗褐色粘質土。③ 暗褐色粘質土。砂まじり。④ 灰色砂層。⑤ 暗灰色粘質土ブロック。⑥ 灰褐色粘質土。⑦ 黒褐色砂質土。⑧ 砂層。⑨ 砂層。⑩ 砂層。⑪ 茶褐色粘質土。⑫ 暗茶褐色粘質土。砂まじり。⑬ 粗砂層。⑭ 明灰色砂質土。⑮ 微砂層。⑯ 暗茶褐色粘質土。⑰ 暗褐色粘質土。⑱ 明灰色砂質土。⑲ 微砂ブロック。⑳ 粒子のやや粗い砂層。㉑ 褐色砂質土。㉒ 灰色粘質土。㉓ 暗灰色粘質土層。

第1号溝は、全体に砂質土の上に穿たれているといふことができる。この砂質土もしくは砂層の成因は、旧河川あるいは第3号溝(川)による堆積物であろう。特に、旧河川左岸の西限は、第1号溝土層実測点のA-A'、B-B'の中間を東から西に横切っているのが、表面観察で確認することができた。

また、C-C'のやや南で、溝底に密着して鴻臚館式の瓦当が出上した。第1号溝が掘削された時期を示す資料のひとつと考えられる。

出土遺物 Fig.14~17. PL.51~53

Fig.14に示したのは、第1号溝出土の破片と、旧河川左岸巻層土の破片とが接合できた須恵器の甕の口縁部である。おそらく、旧河川の堆積土である砂層中に含まれていたものが、第1号溝の掘削によって掘り上げられ、第1号溝の埋土の中にまじったものであろう。したがって、第1号溝掘削よりも以前の資料である。口縁部はほぼ全周分残っているが、肩部以下を欠く。内・外面ともにヨコナデ調整が施されている。砂まじりの胎土であるが、焼成は堅緻で、灰色を呈している。口径は、16.1cmをはかる。



Fig.14 第1号溝・旧河川左岸出土遺物 (1/3)

前述した様に、第1号溝底にはりついて、鴻臚館式の軒丸瓦の瓦当が出土

している (PL.19)。瓦当面を上に向け、第1号溝の東側壁の斜面に背をつけて出土した。瓦当面のさしわたしは、16.1cmをはかる。厚さは、縁辺部で3.1cm、中心部で3.4cmである。中房に1+4+8の蓮子を配する。弁は、複弁8弁蓮華文で、外区には24個の珠文を巡らせる。丸瓦は、瓦当の弁区付近で接合される。サシコミ式の接合と思われる。裏面・側面にはナデ調整を施すが、あまり丁寧とはいえない。胎土は、ところどころに径1mm大の砂粒を含む。黒褐色に焼成されている。

47は、縄文時代晩期の夜白式土器の甕である。外反気味の口縁部のやや下に突帯を貼りつける。突帯の上面に、板状のもので刺突して刻み目をつけている。胎土は、大粒の砂粒を含み、全体に砂質である。焼成は普通で、外面は暗褐色・内面は茶色を呈する。48は、弥生時代前期の甕の口縁部である。口唇部に、鋭い刻み目を持つ。胎土は砂粒を含み、焼成は普通。茶色を呈する。49は、弥生時代中期の甕の口縁部である。内傾した体部から逆し字形に口縁部をつくる。

口縁部下に断面三角形の突帯を巡らせる。胎土は砂粒を多く含む。焼成は普通であるが、砂粒が多いため器表はあれている。茶色を呈する。50も弥生時代中期の甕である。微砂まじりの胎土で、焼成は普通で灰褐色にやきあがる。51は須恵器の甕坏である。胎土は精良で焼成も良く、暗灰色を呈する。52は、須恵器の坏蓋である。胎土

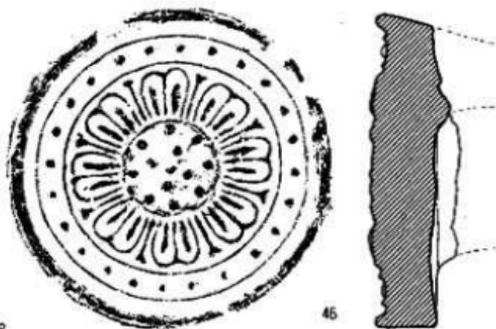


Fig.15 第1号溝出土軒丸瓦瓦当 (1/3)

は精良である。焼成は普通で、赤褐色を呈する。53は、須恵器の坏蓋である。破片は頂部まで残しているが、つまみの痕跡は全くみとめられない。外面頂部はヘラケズリで、端部側の3分の1がヨコナデ調整される。内面は、ヨコナデである。端部は小さく折れて、丸くおさめる。胎土は小砂粒をわずかに含み、焼成は普通で灰色に焼きあがる。口径12cm、器高1.4cmと推定される。54は、同じく須恵器の坏蓋である。頂部外面にヘラケズリを残すほかは、ヨコナデによって整形される。胎土は比較的精良。焼成は普通で灰色を呈する。径14.4cm。55も、須恵器の坏蓋である。全体は、ヨコナデ調整される。胎土には径2mm程の砂粒を若干まじえるが、全体に砂質である。焼成はややあまく、褐色を呈する。径15cm、推定器高3.1cm。56は、須恵器の高台坏である。第1号溝埋土の上半で出土した。高台は断面方形の付け高台である。内底部はナデ調整、体部内面から高台まではヨコナデ調整、外底部はナデ調整がなされる。胎土は小砂粒を所々にまじえ、焼成は普通、暗灰色を呈する。口径13.5cm、高台径9.6cm、高4.1cm。57は須恵器の坏である。埋土上半部出土。胎土精良で、焼成も良好、灰色に焼きあがる。口径15cm。58も須恵器の坏である。内外ともヨコナデ調整。胎土は径1mm弱の砂粒を若干まじえる。焼成は良好で、外面は暗灰色・内面は青灰色を呈する。口径14.8cm。59は須恵器の高台坏の底部である。ヨコナデ調整される。胎土は精良、焼成はややあまく、灰白色を呈する。高台径9.4cmをはかる。60は須恵器の壺の、肩から頭部にかけての破片である。上端は、擬口縁状をなす。ヨコナデで整形される。胎土は、径1mm程の砂粒を含み、焼成は良く堅緻である。暗灰色。61は須恵器の無頸壺の破片である。ヨコナデ調整が施される。胎土には若干の砂粒を含むものの粒子はそろっている。焼成普通。褐色味をおびた灰色を呈する。口径9.1cm。62は須恵器の、おそらく壺の底部である。高台は高く、外側に張り出す。高台底面には、部分的に板目の片痕がみとめられる。内面はナデ、外面はヨコナデ調整がなされる。胎土は精良で、焼成は堅緻、灰色を呈する。高台径10.3cm。63は、須恵器の鉢形土器である。直線的に開く体部から内湾させて口縁部にいたる。口縁部の一部を外側へおこして、片口状につくる。内底部はナデ調整、体部内面から外面はヨコナデ調整で仕上げられる。外底部と体部との境には、ヘラケズリの痕跡がみとめられる。胎土は、ところどころに径1mm弱の砂粒を含むものの、おおむね整っている。焼成は良好で、堅緻に焼きあがる。外面は赤褐色、内面は青灰色を呈する。口径18.8cm、底径10.8cm、器高7.5cmをはかる。64は、土師器の高台坏である。体部はゆるく内湾して立ちあがる。内面の口縁部の下から内底部まで、密にヘラミガキされている。口縁部内面から外面は、ヨコナデによって整形される。胎土は、やや砂質であるが精良で、焼成は普通である。内面は茶褐色、外面は褐色を呈する。口径17.8cm、高台径12.6cm、器高5.3cmをはかる。65~67は、土師器の鉢である。いずれも内湾気味にひらく体部から屈曲して、ゆるく外反する口縁部をつくる。ヨコナデ調整。胎土には砂粒を多く含み、粗い。褐色~暗褐色を呈する。67では、口径18.8cm

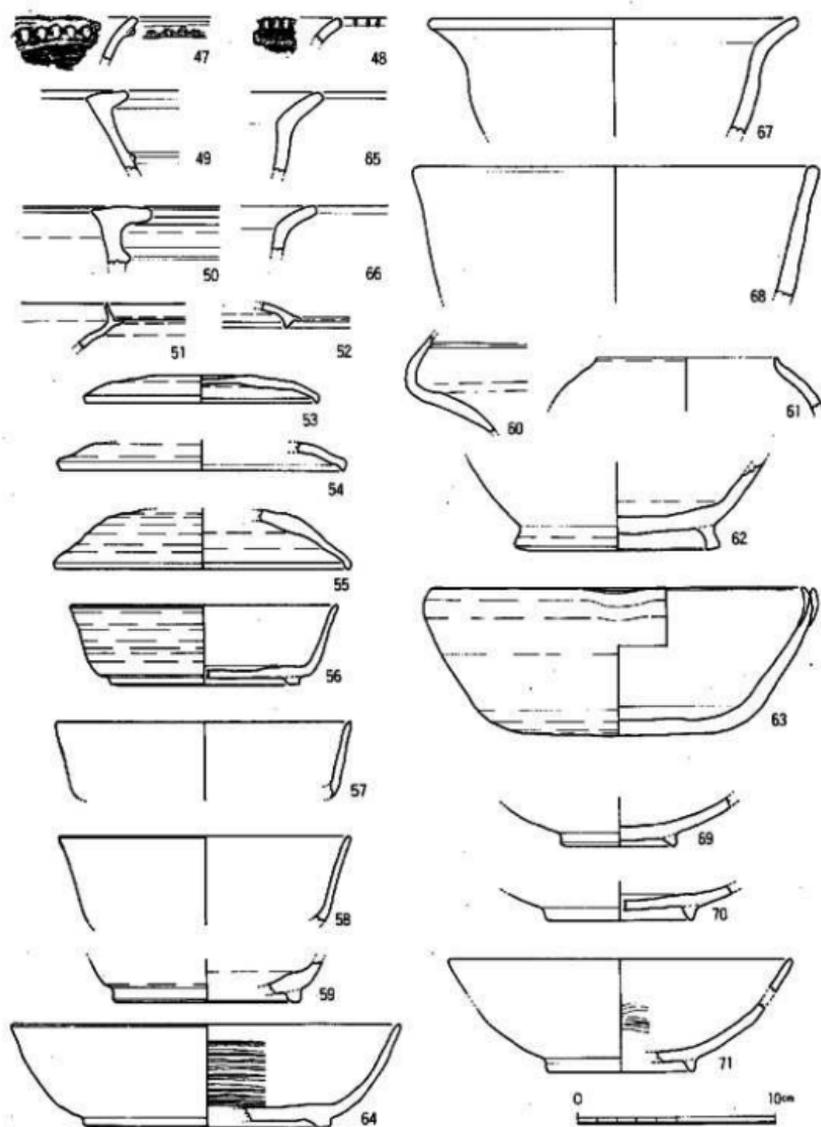


Fig.16 第1号清出土遺物 (1/3)

をはかることができる。68も土師器の鉢である。ヨコナデ整形される。胎土は砂粒を多く含んで粗い。焼成は普通で、外面は褐色、内面は赤褐色を呈する。口径20.2cm。69～71は、瓦器境の破片である。いずれも、断面三角形の高台を貼りつける。69は、第1号溝の埋土の上を覆う層から、出土しており、他の瓦器も溝が埋没し終る時点かその後の遺物である可能性が考えられる。69は外面灰色、内面暗灰色を呈し、高台径6cm。70は、外面淡灰色、内面黒灰色で、高台径7.4cmをはかる。71の口縁部と体部とは、接合できず。同一個体である確証はないが、胎土・焼成等から同一個体であると判断している。体部内面には、ヘラミガキが施されている。胎土精良。外面は灰色、内面は黒灰色を呈する。口径17.5cm、底径7.5cm、器高5.8cmと推定される。

Fig.17には、石器を図示した。72は、漆黒色の黒曜石製石刃を素材としたナイフ形石器である。素材の打面（無調整）とパルプを残し、打向側を基部とする。基部両側を中心に刃つぶしを施し、稜上からの刃つぶしもある。両側上半部及び先端部には、使用による剥離痕が顕著である。ローリングによる磨耗が著しいが、腹面に縦方向の擦痕が認められる。長29.3mm、幅11.4mm、厚5.2mm、73は黒曜石の削片である。長37mm、幅19mm、厚7.5mm、74は粘板岩製の砥石で、四周と小口に砥石面を持つ。折拍しており、現存長5.8cmをはかる。

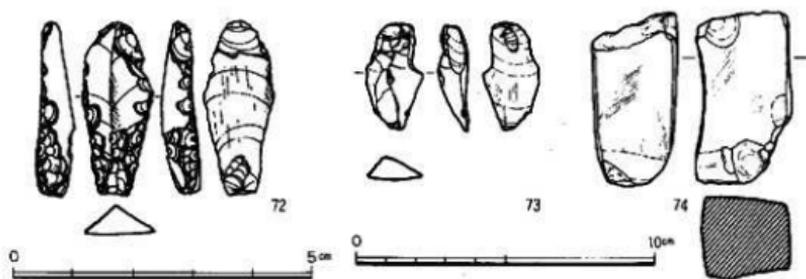


Fig.17 第1号溝出土石器 (1/1・1/2)

(2) 第2号溝 Fig.12-18. PL.22-(2)

第2号溝は、第1号溝を切って斜行する小溝である。幅90cm、深20～30cmで、延長16.2m分を検出している。断面はU字形である。方位はN-9°-Eをはかり、ほぼ南北方向といえる。Tr-2の土層観察によると、第1号溝と第2号溝のほりこみ面はレベル的にはほとんど差がなく、間層も明瞭にはみとめられなかった。したがって、第2号溝は第1号溝の埋没後間もない時期、あるいはまだ第1号溝が埋まりきらず、痕跡が残っている様な段階で掘削されたものと考

えられる。第2号溝は、旧河川上まで続いていると思われるが、埋土の砂質土と旧河川に堆積している砂質土との判別が困難で、平面としては確認できなかった。溝の性格はわからないが、溝底に砂が堆積している点から、水が流れていたと考えられる。溝底には明瞭な傾斜はみとめられず、流水の方向はわからないが、溝はまっすぐに北にのびて、旧河川のなごりである小川につながっていたものと想定したい。

出土遺物 Fig.19. PL.53

75は、上師器の甕である。口縁は如愈形につくる。体部外面は縦方向のハケメ、口縁内面には横方向のハケメをとどめる。胎土には小砂粒を含む。焼成は普通で暗褐色を呈する。口径16.5cm。76~78は、弥生時代中期の甕の口縁である。口縁は逆L字形につくる。76は、口縁を上反り気味につくる。砂粒まじりの胎土で、焼成は普通である。色調は、内面で淡茶色、外面で淡褐色を呈する。口径は、内径22.2cm、外径28.3cm。内面のみヨコナデ調整が残るが、他は磨滅して、

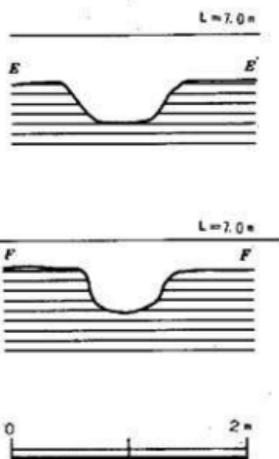


Fig.18 第2号溝断面 (1/50)

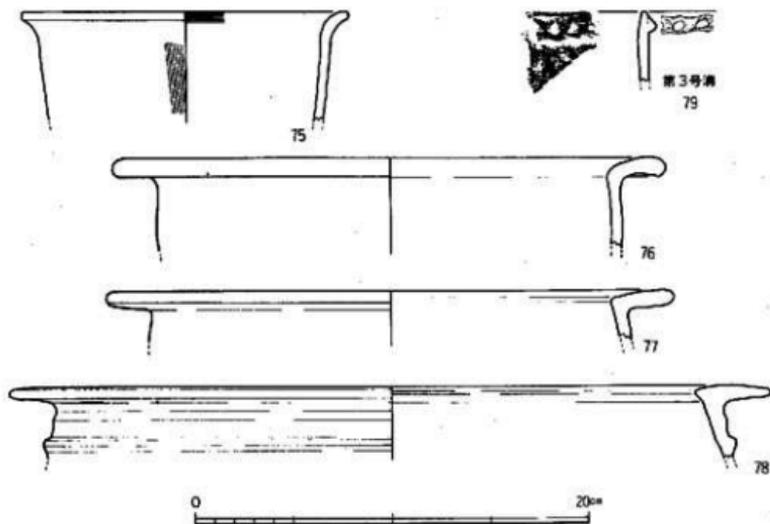


Fig.19 第2号溝・第3号溝出土遺物 (1/3)

みとめられない。77は口縁部上面を平坦につくる。器壁は磨滅していて、調整痕をとどめていない。胎土には、径1mm前後の砂粒をまじえ、焼成は普通、淡灰褐色を呈する。口径は、内径22.6cm、外径29cmをはかる。78の口縁部は内側に張り出し、T字形に近い断面を呈する。口縁部下には、断面台形の突帯を、おそらく一条巡らす。小砂粒を多く含む胎土で、焼成はややあまい。茶色。口径は、内径31.1cm、外径28.8cm。

(3) 第3号溝(自然流路) Fig.12・20. PL.23~25

A-6区からC-3区にかけて検出された大溝で、土層の観察等から自然流路であると判断できる。川幅は10m前後で、延長27m分を検出している。流れの方向は、この部分からだけでは判断できないが、旧河川との関係を念頭におくと、おそらく南から北流し旧河川につながっていたものと考えられる。

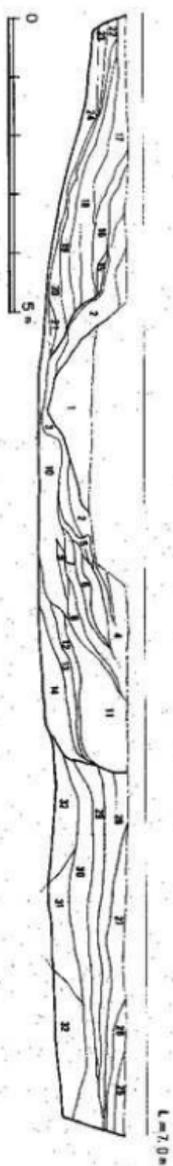
第1号溝の溝底で、第3号溝の岸のラインが確認できるので、第3号溝が第1号溝よりも古いことは間違いない。また、B-5・6区からC-5・6区にかけて、下層水田址と思われる足跡を伴う水田面が検出されているが、第3号溝はこの水田址を切って流れている。したがって、第3号溝は下層水田址の時期と、条里溝である第1号溝が営まれた時点との間で流れていたことが考えられる。

A-6区からB-6区にかけては、第3号溝に切られた、浅い落ち込みが検出されている。ゆるく第3号溝側に傾斜するもので、落ちこみの下面には、腐植土の薄い黒色バンドがみとめられた。第3号溝に先行する流路の痕跡と思われるが、第3号溝の古い姿である可能性も否定できない。

那珂君休遺跡第2次調査では、V層水田址(下層水田址にあたる)の東側に、排水遺構を伴う河が検出されている。位置関係から考えて、この河が第3号溝もしくは第3号溝に切られた落ちこみにつながる可能性は大きい。那珂久平遺跡と那珂君休遺跡第2次調査地点との間のデータがないので想像の域を出ないが、那珂君休遺跡で排水遺構を伴っている河が北流して那珂久平遺跡のA-6区を通して旧河川にそそいでおり、その後身が第3号溝であると考えた。那珂君休遺跡第2次調査との関連については、「第4章 まとめ」で改めてふれる。

出土遺物 Fig.19-79

出土遺物は土器類であるが、細片が多く図示するにいたらなかった。79は、縄文時代晩期終末の夜臼式土器の甕である。口縁部をやや下った部位に突帯をはりつけ、刻み目をつける。全体はローリングを受け、磨滅している。胎土には、砂粒・キンウンモを含む。焼成は普通で、赤褐色を呈する。



- | | | |
|----------------------|--------------------|-----------------------|
| 1. 砂礫 粒分の凝状にはいる | 12. 砂層 微砂 | 23. 粗砂層 粘質土を含む |
| 2. 砂礫 粒子細かい | 13. 白色砂層 微砂 | 24. 黒色粘質土 |
| 3. 微砂層 | 14. 灰黒色砂質土 やや粘性を持つ | 25. 微砂層 |
| 4. 灰色砂質土層 | 15. 砂層 | 26. 灰色粘質土層 |
| 5. 微砂と腐植土が織入に堆積する粘質土 | 16. 明茶灰色砂層 | 27. 砂層 かくしまる |
| 6. 植物遺存体を多く含む砂質土層 | 17. 砂層 | 28. 灰色砂質土 |
| 7. 濃灰色砂質土層 | 18. 砂層 | 29. 灰黒色粘質土 |
| 8. 灰黒色粘質土層 やや砂質 | 19. 灰色砂層 粒子小 | 30. 青灰色粘質土 |
| 9. 砂層 | 20. 黒色粘質土 | 31. 黒色粘質土 |
| 10. 粗砂層 | 21. 砂層 | 32. 灰色砂質土 下部になるにつれて砂質 |
| 11. 砂礫 粗砂 | 22. 灰色砂層 粘質土がまじる | |

Fig. 20 第3号深断面土層 (T-22) 実測図 (1/100)

7. 下層水田址

標高6.2~6.45mで検出された水田面である。この遺構面では、調査区を東から西に横断する旧河川と、その左岸にひろがる水田址を検出した。なお、試験調査およびプラント・オーバー分析の結果では、旧河川の右岸にも水田面を想定しているが、「4. トレンチ及び、トレンチ出土遺物」の項で述べた様に、右岸として考えられている区は旧河川による砂または砂質土の堆積が厚くみられる所で、水田が営まれたとしても極めて不安定な一時的なものであったと考えられる。また、水田面としての把握は困難であろうと思われた。以上の理由で、下層遺構面の精査は旧河川から南側すなわち旧河川と左岸の水田址に限定した。

水田址は、確認できる限りで43枚検出されている。更に数枚の存在が想定されるが、区画をうかがわせるものとは見あらず、可能性を考えるにとどまった。

43枚の水田址は、大きく2群にわけることができる。1群は、水田⑩~⑳で、不整形の区画が地形の傾斜にそって営まれている。1枚の水田面積も24.7㎡~54.8㎡と小規模である。これに対し、水田㉑~㉒は、他の水田とは大畦畔で区別され、ほぼ方形の区画で整然とならんでいる。大畦畔は、幅80cm前後と他の畦畔に比べて2倍近くあり、ほぼ南北方向に直線状にのびるものである。水田㉑~㉒は、区画が方形であるのみならず、面積も段違いに広い。これらの違いは、時期的な差ではなく、水田経営主体の差であると思われる。

下層水田址は、自然地形にそって展開している。旧地形について簡単にのべると、全体として、北から南に傾斜している。また、D-13区からF-10区にむかって浅い谷がはいりこんでいるらしく、この部分が帯状に低くなっている。したがって、水田址でいえば、大畦畔の内側では、⑩→⑪→⑫と低くなる。不整形区画を持つ水田群は、水田⑬・⑭から西に向って低くなって行き、浅い谷の埋土上に並ぶ水田⑮→⑯→⑰と下っていく。

水田の水利も、この水田面毎の高低差を利用して行なわれていた。水口は必ずしも全水田にそろっている訳ではなく、むしろ水口を持つ水田の方が稀である。おそらくは、畦畔越しに取排水したのであろう。蜂の巣状にならぶ小規模水田群の方は、水利の系統を確定しがたいが、方形大規模水田群では、水田⑰の水を水田⑩に導き入れ、水口を通して水田⑩→⑪→⑫へと流し水田⑫から大畦畔に設けられた水口を通して水田⑬に排水していると考えられる。小規模水田群も同様に、地形に沿っておとし、最終的には水田⑰に流す。そのためと思われるが、水田⑰の土壌には砂粒が多く含まれ、互層状に数枚の水田土壌がみとめられる。

Fig. 22に示したのは、水田面の高低を表わす断面模式図である。縦軸には、高低差を強調するために縮尺をかえた軸もとっている。東西断面では中央やや西寄り、水田⑰が、南北断面では南側、水田⑰が、最も低くなっているのを読みとることができる。

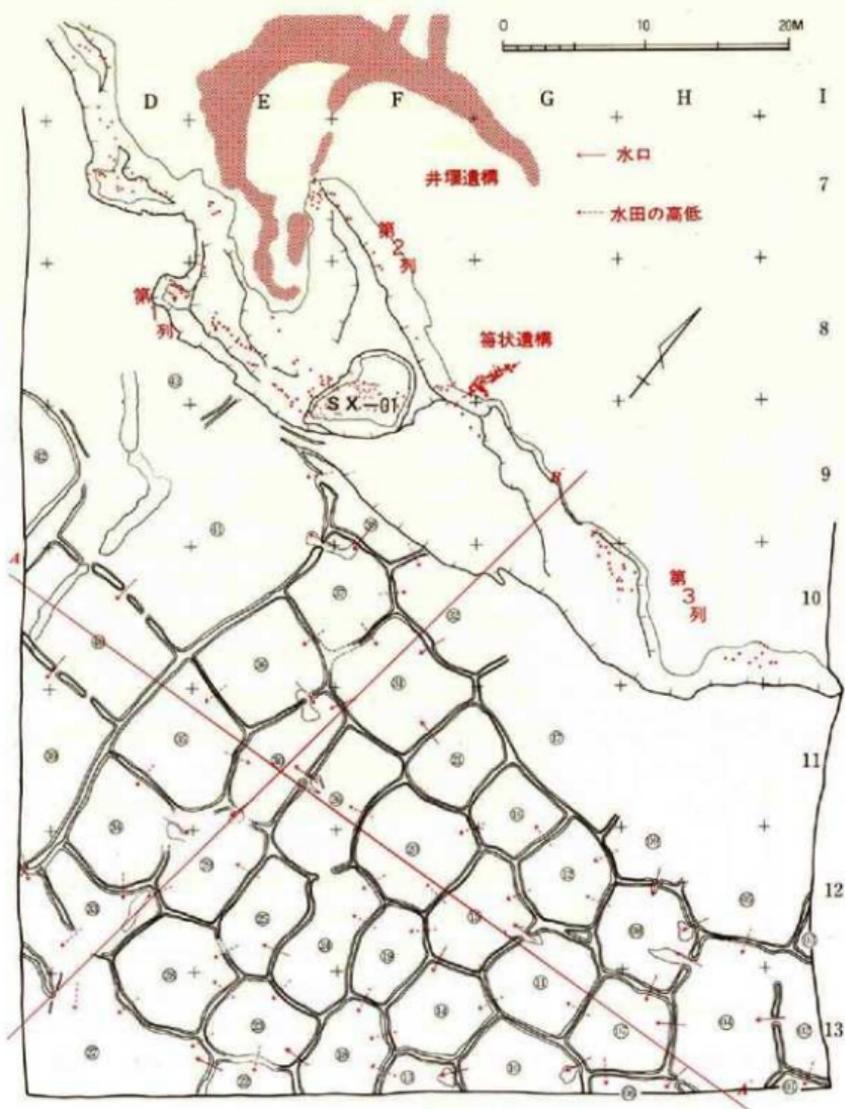


Fig.21 下層水田址遺構実測図。(1/400)

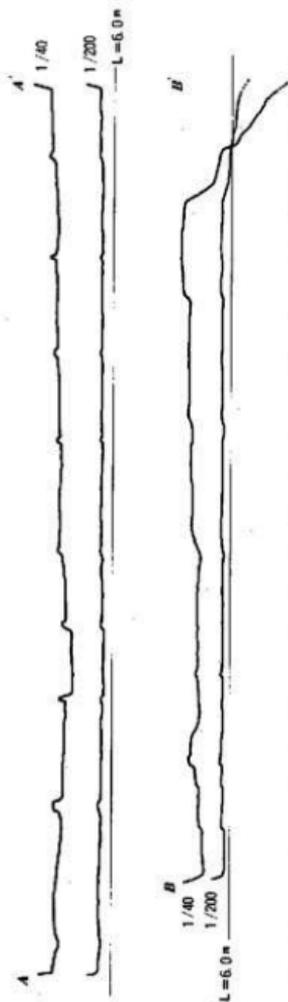


Fig. 22 水田址高低様式図

畦畔は、河岸に近付くと中断してしまい確認できなくなる。また、河岸付近では水田面のレベルも一定せず、凹凸が著しい。これは、旧河岸の氾濫で畦畔や水田土壌が押し流された為、と考えるのが妥当であろう。前述した様に、トレンチの土層観察によって、旧河川の左岸は下層水田面よりも上位から落ち込んでいることが確認できている。すなわち、下層水田址は、旧河川の氾濫で洗われたのみでなく、河岸沿いにあったであろう水田そのものをも削り流されていると考えることができる。ただし、後述するが護岸の杭の位置から、下層水田址当時の旧河川もそれほど東へ離れてはいなかったことがうかがわれる。

水田土壌は、灰黒色のシルト質粘土である。大体において、畦畔も、同様の土を盛り上げて作っているが、部分的に砂まじりの粘質土を盛っている箇所もある。その場合も、水田土壌と同質の畦畔がわずかながらみとめられ、その上に砂まじりの粘質土を貼って畦畔の形を整えている状況が確認できている。おそらく、畦畔を補修しているのであろうが、その際に従来の水田区画を踏襲していることがわかる。

水田面には、多数の足跡が残されていた。大人・小人の足跡が入り乱れ、その動線もつかめない程であるが、牛・馬など家畜の足跡は見られない。また、足跡の状態を水田毎にみると、いくつかの類型がみとめられる。

1類は、ほとんど足跡のみられない水田で、㊸・㊹がこれにあたる。

2類は、㊺・㊻・㊼にみられる様に、水利の導線上に足跡が残るものである。㊼～㊽では、東西方向の畦畔に3ヶ所の切れ目があり、最も西の切れ目を結んで水の流れた痕跡が認められるが、いずれも水口と考えて差支えはなからう。

3類は、畦畔にそって足跡の全くみられない部分のあるもので、㊾・㊿・㊽がこれにあたる。㊾では、東側と西側に足跡のない部分が広く存在し、水田の平面形は六角形を呈するものの、足跡は長方形にしか存在していない(PL.31-(2))。㊿では東側、㊽では西側に同様の部分がみとめられる。

4類は、全面に密に足跡のみとめられるものである。㉔に代表されるが、おそらく㉓・㉒・㉑もこの類であろう。

5類は、ほぼ全面に足跡が残るものの疎なもので、㉐・㉑・㉒などがこれにあたる。上記の類型には入らないものは、5類に含めて考える。

これらの類型を通観すると、2類は方形大規模水田群においてみられ、4類は比高の高い水田にみられる。3類は、比高から言えば中位に位置するが、特徴的とは言えない。3類における足跡の偏在については、現時点では解答を見出していない。

水田㉑・㉒では、爪先を畦畔に向けた足跡が、畦畔ぞいに並ぶという状況がみられる(PL. 33)。周辺の足跡の状況からして、これらの足跡が畦畔を股いで歩く際につけられたものではないことは明らかである。強いて考えれば、畦畔の補修を行っている際に踏みこまれたものと言えよう。

水利については前述したが、以下水口についてふれる。水口が検出できたのは17ヵ所(水田㉑～㉒)に残された5ヵ所の水口も含む)、水口が推定できたのは11ヵ所である(Fig. 21)。水口に何らかの施設を伴っていたか否かは断言できないが、㉑～㉒の水口には、㉑の側に径2～3cmの小さな杭を打ったと思われる痕跡があった。4本分ほどみとめられたが、配置に規則性はみられない。また、水田㉑～㉒の水口では、畦畔の㉑の側に薄い板があてられていた(PL. 39-②)。その他の畦畔には、杭の痕跡も板もみとめられない。上記の例も設備と言える様な計画的なものではなく、水口を塞ぐ必要から一時的に設けられたものと考えた方がよいと思われる。

水田	面積	水田	面積	水田	面積	水田	面積
㉑	2.0㎡以上	㉒	32.8㎡	㉓	30.4㎡	㉔	43.3㎡
㉒	24.0㎡以上	㉕	15.08㎡以上	㉖	41.2㎡	㉗	54.8㎡
㉓	1.8㎡以上	㉘	32.9㎡	㉙	30.9㎡	㉚	50.4㎡
㉔	推定75.6㎡	㉛	37.0㎡	㉜	47.3㎡	㉝	37.3㎡
㉕	推定27.0㎡	㉞	25.1㎡	㉟		㊱	推定14.3㎡
㉖	7.2㎡以上	㊲	35.36㎡以上	㊳	46.6㎡	㊴	推定120.0㎡
㉗	35.5㎡	㊵	28.0㎡以上	㊶	39.6㎡	㊷	推定74.4㎡
㉘	37.8㎡	㊸	24.7㎡	㊹	39.1㎡	㊺	190.0㎡
㉙	19.2㎡以上	㊻	49.2㎡	㊼	54.8㎡	㊽	17.64㎡以上
㉚	31.5㎡以上	㊾	29.8㎡	㊿	30.6㎡以上	㋀	111.0㎡以上
㉛	39.0㎡	㋁	13.44㎡以上	㋂	27.4㎡		

表1. 下層水田址面積一覧表

Fig.23に図示したのは、水田⑦→④の水口である。水田面の相対的な高さから、⑦から④に導水したと考えられる。水田⑦には、溝状に配水の痕跡が残っている。幅は35cm前後、深さ8cm程度はかる。測量図から推定したところでは、水田⑦から④に流れこんできた水が、ほぼ直角に折れてこの溝状部分にはいり、⑦から④に取水されるシステムになっていると思われる。水田④の側にも、水口を要とした扇形の浅い落ちがみとめられる。

Fig.24は、水田⑧の3つの水口である。(1)は、水田⑧→⑥の水口で、3つの水口の中では最も幅の広いものである。水口の幅は、約50cmをはかる。⑧の側にも⑥の側にも深さ7cm程のおちこみがみられるが、⑥側のおちは、長さ70cm程の溝状を呈する。他の2つの水口と比べて足跡が集中している。(2)は、水田⑧→⑤の水口である。開口部は畦畔基部で5cm足らずの幅しかない。⑧側に扇形の浅いオチがみとめられる。足跡は、⑥の側に多数残っているが、⑤の側には、ほとんど見られない。(3)は、水田⑧→④の水口である。連続している畦畔を鋤で縦に切り取った様な狭い水口である。やはり⑥側に落ちが発達している。④側には、足跡もみとめられない。

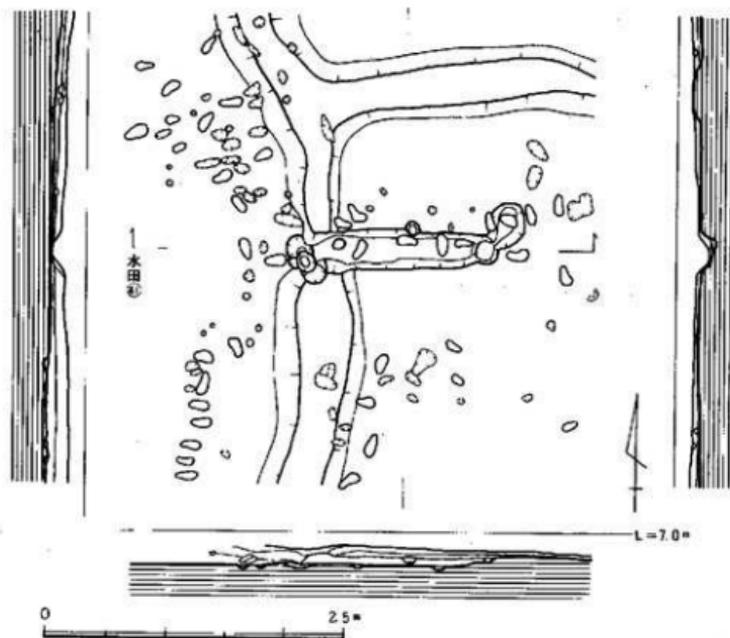


Fig.23 水田⑦→④水口実測図 (1/50)

わずか4例の水口について例示したが、水口の部位について共通要素があるので、ふれておく。それは、畦畔と畦畔の接合部には作られないという点である。また、割合からみると、畦畔の中央付近に設けられる例は少なく、接合部付近に寄っている。ただし、方形大規模水田群

は例外で、畦畔の途中を切って水口を設けている。

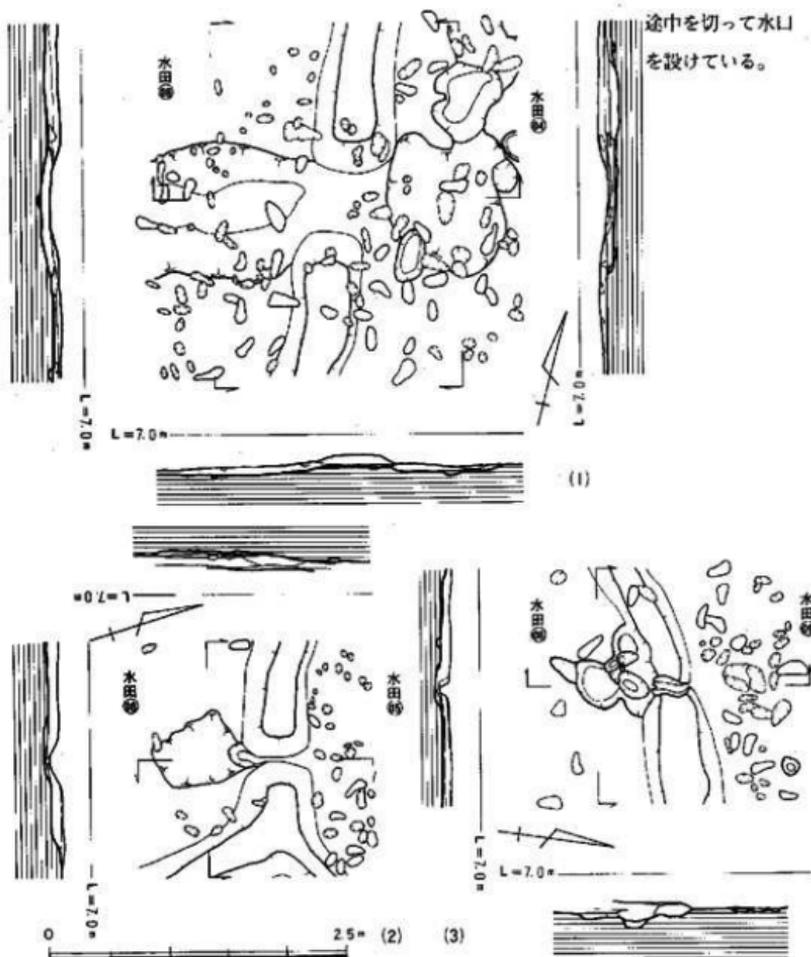


Fig. 24 水田の水口実測図 (1) ②④→③ (2) ⑤⑦→⑥ (3) ⑧⑩→⑨ (1/50)

出土遺物 Fig. 25. PL. 54-(1)

下層水田址から出土した遺物は、量的にはかなり少ない。また、土器片にしても小片・細片が多く、図示できるものは数点のみしかない。それらの遺物を全体に見渡して気付くことは、土師器・陶磁器類の破片はただの1片も含まれていないということである。出土遺物は、夜臼式土器片から弥生式土器までの範囲内にとどまっている。

80は、縄文時代晩期の夜臼式土器の壺である。底部の破片であり、底部はバチ形に外にひろく。底部の屈曲部に指押えの痕跡をとどめる他は、ナデ調整される。胎上には径2mmの砂粒を含むが、全体としてきめが細かくよく整っている。焼成は普通で、淡赤灰色に焼きあがる。底径は6.7cmをはかる。水田⑦出土である。81は、弥生時代後期の無頸壺である。丹塗磨研の土器と思われるが、丹は折り返した口縁の屈曲部の影にわずかに残っているのみである。器壁は、磨滅している。胎土はところどころに径3mm程の砂粒を含み粗い。焼成は悪く、淡褐色を呈する。口径8.2cm、器高は約7cmと推定される。水田⑩出土。82も弥生時代後期の無頸壺である。器表が磨滅しており、調整痕は残っていない。胎土は砂粒を若干含み、焼成は普通。淡茶色を呈する。口径7.8cmをはかる。水田⑧出土。83・84は、無頸壺の壺である。83は、外面に丹塗の痕跡をとどめている。おそらく、一對の孔が2ヶ所穿たれていたと思われるが、小片のため、1孔しかみとめられない。胎土は砂質で、焼成はあまく、器壁は流れる。灰褐色を呈する。径13.2cm、水田⑨出土。84の外面にも部分的に丹が残っている。穿孔については、83同様1孔しか残っていない。胎土には小砂粒を多く含む。焼成はややあまく、褐色を呈している。径15.2cm、水田⑨出土。85も弥生時代後期の無頸壺である。器壁は磨滅気味だが、部分的に丹が残っている。径1mm以下の砂粒を多く含む胎土で、焼成は普通である。やや赤味を持った淡褐色に焼けている。口径13.4cmを推定できる。水田⑨出土。86は、弥生時代中期の甕の口縁である。口縁部は逆し字形に折り返す。胎土は径1mm程の砂粒を多く含み、粗い。焼成は悪く、器表はあれている。淡褐色を呈する。口径20cm、水田⑩出土。87は、弥生時代中期の壺の口縁で、口縁部はT字形をなしている。突帯はつかない。器表は磨滅して、調整痕をとどめていない。胎土には、径1～2mmの砂粒を多く含む。焼成は普通で、やや黄十色がかかった褐色に焼き上がっている。小片であり、口径復元はできなかった。水田⑩と⑨の間の畦畔上から出土している。88は、弥生時代後期の鉢形土器である。口縁部は外方にひねり出し、上面をハケメで平坦に作った後、ヨコナデ調整を施している。体部外面は、縦方向に6～7本単位のハケメ調整を重複して施す。体部内面は斜め方向のナデ調整である。胎土には大小の砂粒をまじえるが、焼成は良好で、明るい褐色を呈する。口径19cmと推定された。下層水田址の下の暗褐色粘質土層（柱状図ポイントNo.3のVIa層上面）より出土した。89は、弥生時代中期の器台形土器の筒部の破片である。ローリングを受けた為か器壁はあれており、器面調整はほとんど残っていない。わず

かに外面に縦方向のハケメがみとめられるのみである。胎土には、径1mm大の砂粒を含む。焼成は悪く、茶褐色を呈している。小片のため、傾き・径ともに不確実である。水田◎より出土した。90は、弥生時代中期のおそらくは壺形土器の底部破片である。器壁は流れていて、調整痕はうかがえない。胎土は、小砂粒を多く含んで砂質である。焼成は普通。外面は灰褐色、内面は淡褐色を呈する。底径7cm。水田◎より出土。91は、砂岩製の石鎌である。刃部先端側を欠失する。刃部は、ほとんど片側から研ぎ出されている。現存長14.3cm、幅5.3cm、厚さ0.96cmをはかる。水田◎より出土。92は、黒曜石製の石鎌である。門基式の石鎌で、小型で軽い。長さ1.95cm、基部幅1.4cm、厚さ0.35cmをはかる。水田◎より出土。

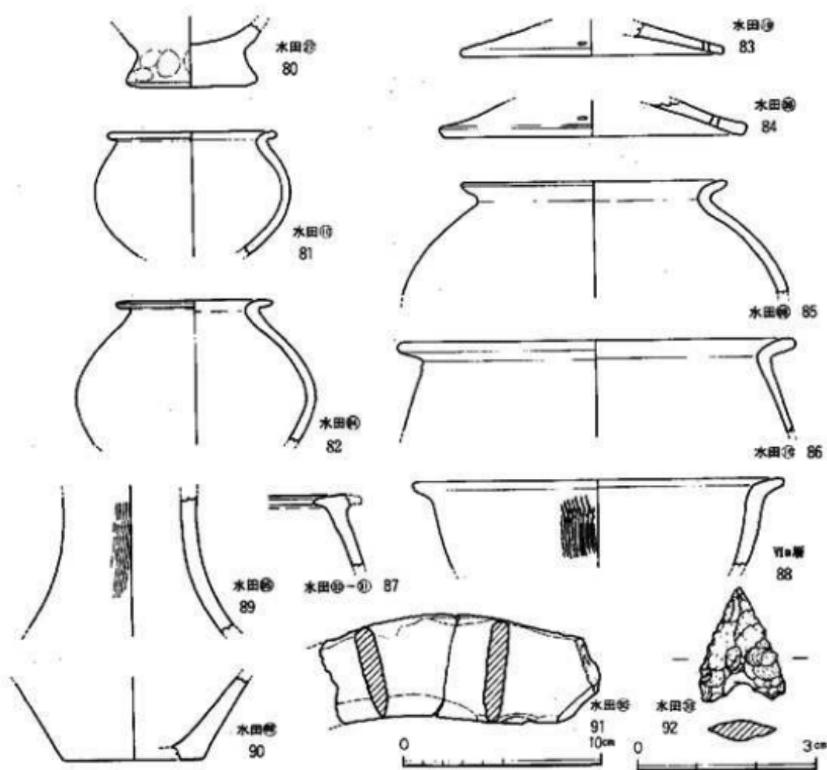


Fig. 25 下層水田址出土遺物 (1/3・1/1)

8. 護岸杭列・SX01・笹状遺構

下層水田址の調査では、旧河川の河岸部分から、護岸と思われる本杭列、溜り状を呈するSX01、G-7区では木杭に横木をかませた笹状遺構が検出された。以下、順を追って述べる。

(1) 護岸杭列, Fig.21

旧河川の河岸にそって検出されているが、杭列のつながり・レベルから見て3列に分けることができる。

第1列は、D・F-6～8区にみられるものである。下層水田址からやや下った位置に並んでいるもので、下層水田址との比高差は50～70cmをはかる。D-8区の北隅近くに岸の湾入部があり、木杭の集中が見られる。下層水田址に伴う水利遺構の可能性も考えられる。

第2列は、F-7区からG-9区にかけて、標高6m前後に打ちこまれている。標高では、第1列杭列とは10cm程度低いだけであまりかわらないといえる。

第3列は、H-10区北隅とH-10区東隅でみられるもので、H-10区北隅の杭列は標高5.5～5.6m、H-10区東隅の杭列は5.8m前後に打たれている。杭列の中断している部分は、旧河川の河岸検出時にトレンチを入れた地点である。

第1列杭列が下層水田址に伴うものとする、第1列杭列がみられなくなるF-9区以東においては、下層水田址当時の河岸は削り流されていると考えられる。これは、Tr-19で確認した旧河川の左岸が下層水田址を切っている状況と矛盾しない。第1列杭列と第2列杭列は、上記した様に標高的には大差ない。したがって同時期あるいは近接した時期のものとも考えられる。第1列杭列と第2列杭列の間には、後述するSX01がある。第3列杭列は、明らかに第1列・第2列杭列より低位にある。また第3列杭列のH-10区北隅のものは、G-8区に検出された笹状遺構や旧河川にわたされた井堰遺構（本年度「那珂久平遺跡Ⅱ、井堰編」として報告予定）と同レベルにある。後述する笹状遺構や、井堰遺構の年代観とあわせると、弥生時代の杭列である可能性が少なくない。

(2) SX01, Fig.26, PL.41・42

F-8～9区で検出された遺構である。長径8.7m、短径6mをはかる水溜り状の遺構で、内側に木杭が打たれている。青灰色化した八女粘上層に掘りこまれている。E-7区からF-8・9区にかけて、河岸をなす粘土層が大きく湾入しており、SX01はその最奥部に位置する。深さは西縁（湾入側）で10cm前後、東南側（下層水田址側）で80～90cmをはかるが、底面は標高5.6m前後でほぼ水平である。部分的に浅い落ち込みがみられる。木杭は、ほぼ中央を西南一東北

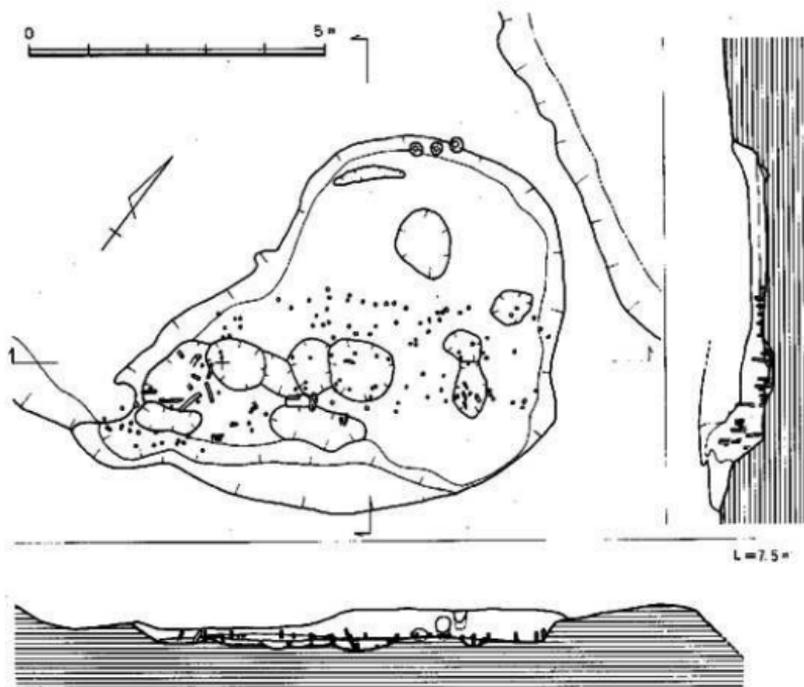


Fig.26 SX 01 遺構実測図 (1/100)

に幅1.7mほどの帯状に打ちこまれており、全面にみとめられるものではない。弥生式土器の小片が出土しているが、時期の決め手にはかける。溜り部の底の標高5.6mは、G-8区筒状遺構や、井堰遺構の杭の頭の標高と近似する。したがって、SX 01を井堰遺構と同時期のものとする、井堰で増量した水をE-7・8区の湾入部分から導水しても、何らかの方法で汲み上げない限りSX 01には溜らない。一方、下層水田址当時のものと考え、SX 01は常時水面下に沈むことになろう。SX 01の機能とともに未解決な問題といわざるをえないが、下層水田址に近い時期を考える方が適当であると思われる。

(3) 筒状遺構 Fig.27. PL.43~45

G-8区において、木杭に横木をわたした筒状の遺構を検出した。上でもふれている様に、杭の頭の標高は約5.6mをはかる。長さは、3.5mをはかるが、後述する様に、この筒状遺構と、井堰遺構がほぼ同時期のものであるとすれば、旧河川の当時の幅は少なくとも20mはあったと

推測され、この筈は機能しないことになる。その後の旧河川の流路の変遷で、半ば以上が流れて失われたという可能性もあろうが、調査時の所見ではそのような形跡はみとめられなかった。

筈状遺構の構造は、旧河川の下流側から上流方向へ傾けて、径3～7cmの木杭を打ちこみ、その上流側に径7～10cmの横木をわたしたものである。基本的な構造は井堰遺構と共通するが、何度も補修・補強をくり返し、また横木にも径20cmをこえる建築材を用いている井堰遺構と比較するとあまりにも貧弱で、とうてい旧河川の水流に対抗できないと思われる。

筈状遺構に打込まれている木杭は、最も長いもので110cm、大方が80cm前後である。上記のことと考えあわせると、この筈状遺構がせきとめることができたのは、旧河川の支流もしくは水

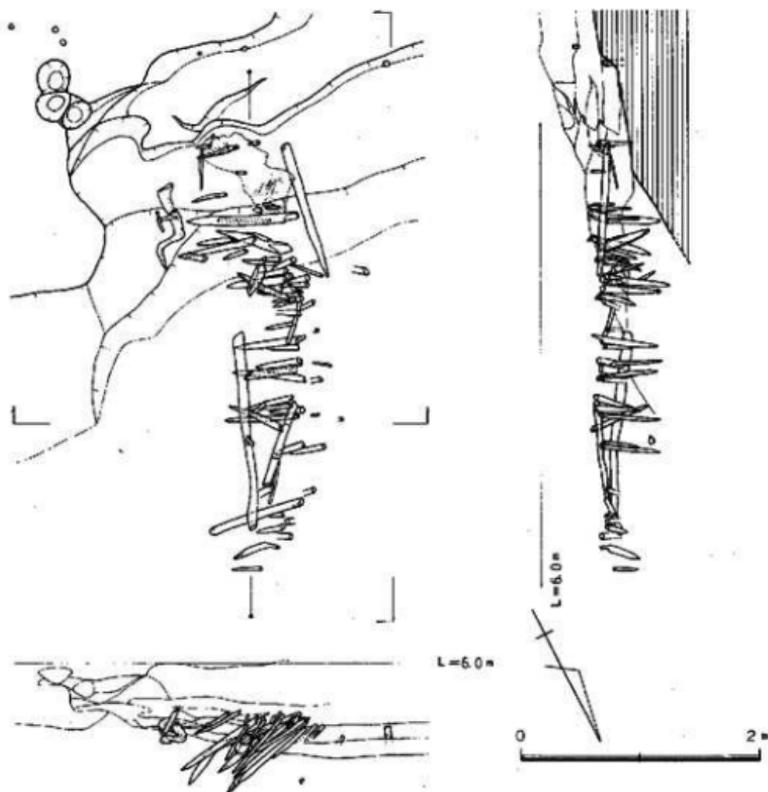


Fig.27 筈状遺構実測図 (1/50)

路ということになる。

出土遺物 Fig.28. PL.54-(2)

箸状遺構から出土した遺物は、縄文時代晩期から弥生時代中期の幅の中におさまっている。

93は、縄文時代晩期の鉢形土器の口縁部と思われる。体部から内方に屈曲し、外反して口縁部をつくる。器壁はローリングをうけて磨耗しており、調整痕をとどめていない。胎土は小砂粒をまじえる。焼成は普通で、暗褐色を呈する。小片であり、傾き・口径とも不確実であるが、口径14.5cmと推定できる。94は、弥生時代中期の小型の鉢形土器である。体部は内湾気味にひらき、口縁部は丸くおさめる。器壁が磨滅しているため細かい調整痕はうかがえないが、体部下半には、指で押えた痕跡が残っている。体部中央やや上に、断面三角形の突帯が貼り付けられている。胎土は砂粒を多く含む。焼成は比較的良好で、褐色を呈している。小片のため傾きが不確実。口径10cm、底径2.8cm、器高5.1cmを復元できる。95は、弥生時代中期の壺形土器の底部と思われる。砂まじりの胎土で、焼成はややあまい。淡灰褐色を呈する。器壁が磨滅し、調整は不明。底径は5.0cmをはかる。96は、弥生時代前期の甕の口縁部である。口縁は、外側にゆるくひねり出して如意状につくる。口唇部及び口縁部下に、沈線を1条巡らせる。器壁は磨滅しているため、調整痕はうかがえない。胎土には径1mm大の砂粒を多く含む。焼成は普通で、茶褐色を呈する。小片であるが、口径23.8cmを推定することができる。97は、弥生時代中期の甕である。口縁部を逆し字形につくる。ローリングを激しく受けており、器壁は凸凹にあれて

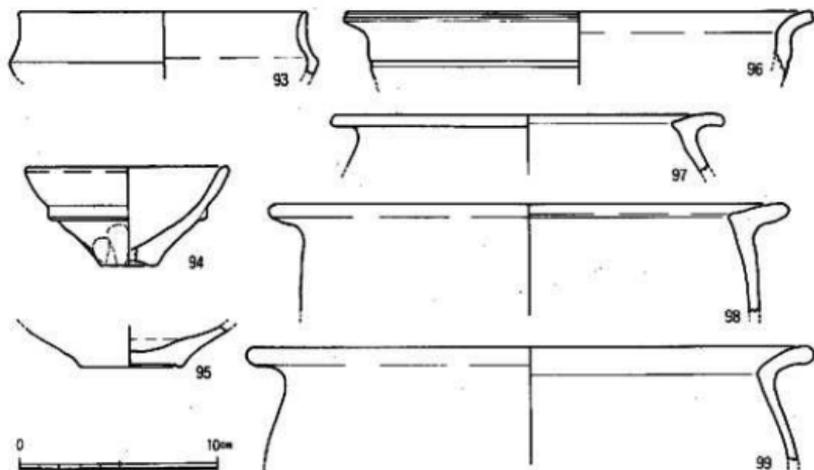


Fig.28 箸状遺構出土遺物 (1/3)

いる。調整痕は残っていない。胎土には、微砂・キンウンモを含む。焼成はややあまく、灰褐色を呈する。口径は、内径で14.6cm、外径で20cmをはかる。98は、弥生時代中期の甕である。体部はほぼ直立し、やや上に関き気味の逆し字形の口縁をつくる。器壁は磨滅し、調整不明。小砂粒を多く含む胎土で、焼成は普通である。灰褐色を呈する。口径は、内径で20.2cm、外径で26.4cm。99も、弥生時代中期の甕である。やや口すばまりの体部から外側に折り返して逆し字型の口縁部をつくる。器壁は磨滅し、調整は不明。胎土には砂粒を比較的多く含み、焼成は普通。淡濁褐色を呈する。口径は内径で23cm、外径28.8cmをはかる。

Fig. 29に示したのは、籬の杭の間から出土した加工木片である(PL.45)。木器自体は、各面に削痕が認められるものの製品として形をなしていたとは思われず、用途も不明である。一見、上端部を削っている様に見えるが、加工したものかどうか、はっきりとしない。各々の削痕は鋭く、面も平滑であり、鉄製の工具によるものと考えられる。使用痕は、みとめられない。

一部に樹皮が残っている。長さ20.4cm、最大幅15.6cm、厚さ2.2~4.8cmをはかる。

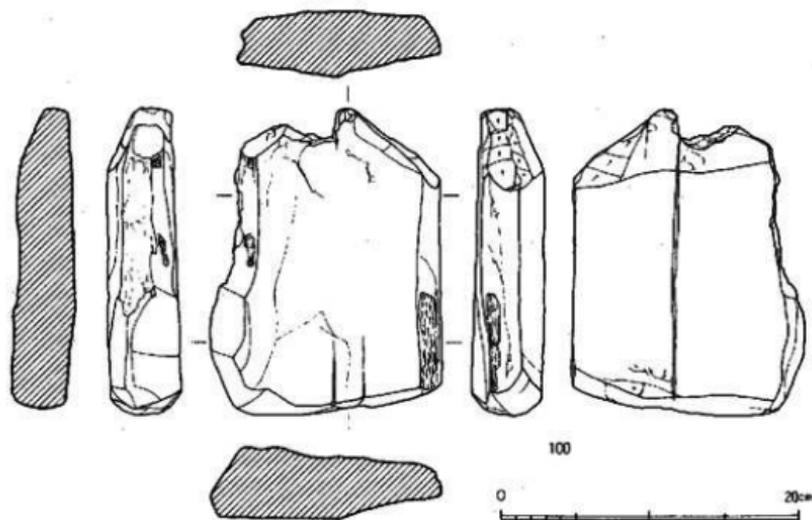


Fig. 29 籬状遺構出土木器 (1/4)

9. 弥生時代水田址

旧河川部分から弥生時代後期の井堰が検出されるに及んで、下層水田址の下に弥生時代水田址が存在するという可能性が考えられた。また、旧河川調査時には試掘調査の結果を参考にして仮の右岸をつくっていたが、片堰遺構の調査で弥生時代後期の右岸が点としておさえられ、仮岸の下に当時の岸がのびていることがほぼ確実となった。そこで旧河川の右岸と左岸にトレンチを設定し、弥生時代後期の水田址、河岸を確定することになった。

仮の右岸から北が、旧河川の堆積物である砂質土を基盤としていることについては前述した。今回右岸に設定したトレンチでもそれを追認しているが、Fig.31-12層は、下層水田址にあたる可能性がある。前述したトレンチではこの土層は確認されず、部分的に残っていたものであろう。また、仮右岸から3～4mで河岸と考えられる落ちを上下に3ヶ所確認できた。し

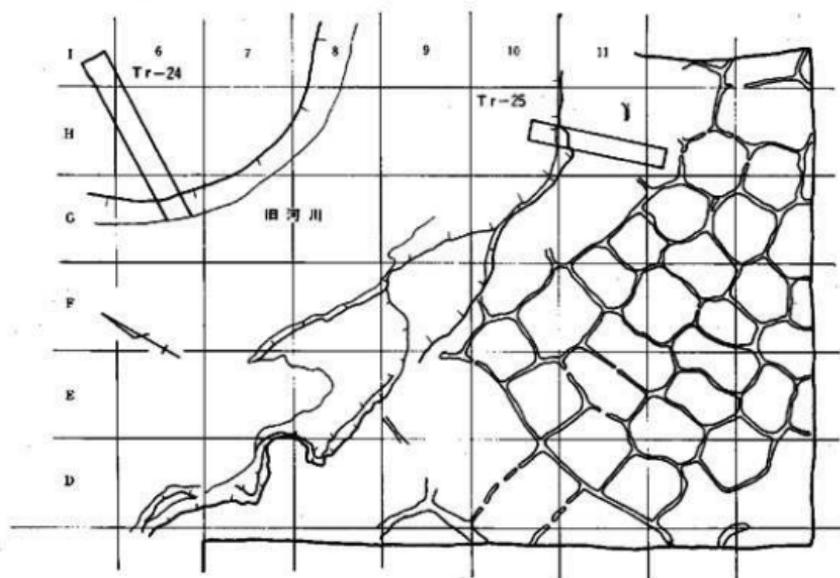


Fig.30 Tr-24・Tr-25配置図 (1/500)

かし残念ながら、弥生時代後期水田址にあたるであろう水田土壌(粘質土)は、確認できなかった。

左岸に設けたトレンチからは、いくつかの点が明らかになった。

まず第1に、このトレンチでは八女粘土層がみられないという点である。G-9区から下流側、SX01や葎状遺構あたりでは、岸部分に珪酸化して青白色を呈した八女粘土層がみとめられ、杭もこれに打ちこまれていた。しかし、このトレンチの最下層は砂層である。G-9区以西で八女粘土を洗っていた河は、以東ではより南に偏っていたのであろう。

第2点は、上述の砂層の上に5枚の粘質土層が間層をはさまず堆積している点である。鉄分・マンガン分の入り方をみると必ずしも水田土壌とは言えないが、井堰遺構から取水した一連の水田が存在したことは間違いないから、これら粘質土の内のどれか、標高から言えばおそらく10層が弥生時代後期水田面の可能性が高い。

第3点は、下層水田址に先行する河岸が確認できた点である。弥生時代水田址と推定される10層との関係は、今ひとつはっきりとしないが、土層による限りでは、10層より上から切りこんできているものではない。10層にともなう河岸の可能性も否定できないであろう。

弥生時代水田址は、那珂君休遺跡第2次調査では確認されていない。しかし、那珂久半遺跡の井堰遺構は、弥生時代水田址の存在なくしてありえないと考えられる。井堰遺構については、1987年報告予定なのでそちらに譲るが、井堰遺構から出土した遺物は、弥生時代終末をのるものではない。新しい遺物ほど井堰の上部から出土しているのは、井堰が次第に埋没していった過程に従ったものとして理解されるが、出土遺物は、少なくとも古墳時代を待たずに井堰がその機能を失ったことを示している。また、下層水田址と井堰との比高を測ると、その差は1m近くに及び、この井堰が下層水田址に伴うものでないことは明らかである。これらの点から、井堰によって灌漑される弥生時代の水田が旧河川にそってひろがっていたであろうことは、必然的に考えざるをえない。

今回左岸に設けたトレンチで確認された第2点・第3点は、以上の様な弥生時代水田址との関連で考えられるべき点であると思う。今後の周辺の調査による成果が期待されるところである。

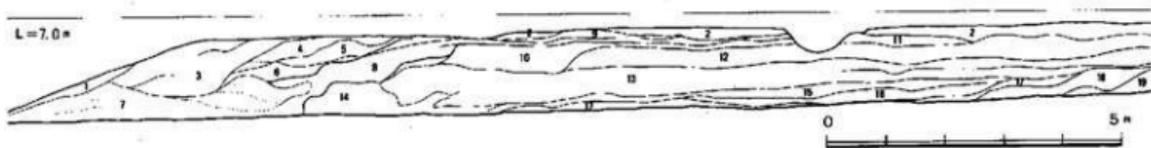


Fig.31 旧河川右岸トレンチ (Tr-24) 土層実測図 (1/100)

- | | | | | |
|-----------|-----------------|------------------|------------------|-------------------|
| 1. 砂層 | 5. 砂層 | 9. 灰色砂質土, Fe 含 | 13. 暗灰色粘質土, Fe 少 | 17. 灰色砂質土 |
| 2. 茶褐色砂質土 | 6. 砂層 | 10. 灰褐色砂質土, Fe 多 | 14. 砂層 | 18. 暗灰色砂質土, 縞状に砂 |
| 3. 灰色砂質土 | 7. 砂層, 縞状に堆積 | 11. 灰色粘質土 | 15. 暗灰色砂質土 | 19. 暗灰色砂質土 上半で粘性有 |
| 4. 灰色砂層 | 8. 灰褐色砂質土, Fe 含 | 12. 灰褐色粘質土, Fe 含 | 16. 暗灰色粘質土 | |

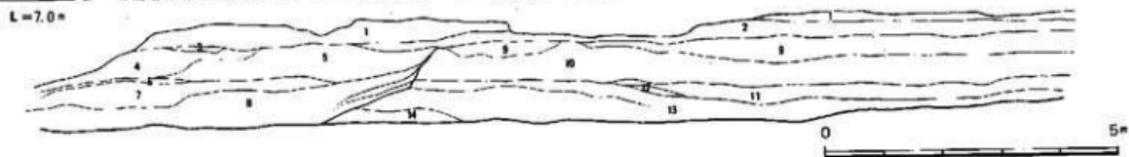


Fig.32 旧河川左岸トレンチ (Tr-25) 土層実測図 (1/100)

- | | | |
|-------------------------|-------------------|-------------------|
| 1. 茶褐色粘質土, やや砂質気味, Fe 含 | 6. 灰色砂質土, 粘性を持つ | 11. 漆黒色粘質土, Fe なし |
| 2. 灰褐色粘質土 | 7. 砂と粘質土の互層 | 12. 黒色砂質土 |
| 3. 微砂層, Fe 含 | 8. 灰色砂質土, 上半で粘着力有 | 13. 青灰色砂層 |
| 4. 淡灰褐色粘質土, Fe 含 | 9. 淡灰褐色粘質土 | 14. 砂層 |
| 5. 灰色粘質土, Fe なし | 10. 黒色粘質土, Fe なし | |

第三章 ま と め

那珂久平遺跡の調査では、上・下2面の水田址と、その間にあって溝群を主体とした中層遺構面、条里遺構と考えられる第1号溝、調査区を横断する旧河川とそこに設けられた弥生時代後期の巨大な井堰遺構が検出された。井堰については、来年度『那珂久平遺跡Ⅱ、井堰編』として報告を予定しているので、それに譲るとして、水田址・中層遺構面・条里遺構について簡単な総括を試みる。なお、旧河川についての考察を含めて最終的な総括は、来年度改めて行なうことにする。

1. 中世水田址（上層水田址）について

前述した様に、中世水田面は調査区のほぼ南半分で検出した。水田は、13枚以上が確認されたが、確実に区画まで把握できた水田は、残念ながらない。検出できた畦畔と、足跡の疎密から推定された13枚の水田には、面積の大きいものと小さいものの二種類がある。小区画の水田は、A～C-3～6区あたりに集中してみられる様だが、未掘部分にはさまれているため、はっきりとは断言できない。いずれにしても小区画水田と大区画水田とは、標高的に言っても人差なく、周辺部分も含めて考えれば、両者は混在していたと考えられる。しかし、水田址③と水田址④では、前者は110㎡程度、後者は320㎡程度と、ほぼ3倍近いひらきがある。地形的にみても、水田区画を左右する程の変化はみとめられないから、水田面積の差は、水田経営主体の差であると言えよう。

水田の区画は、ほぼ現在の畦畔方向と同方向を示し、これは那珂郡の条里方向N-38°-Wと一致する。那珂君休遺跡の水田址Ⅰでも、この方位に近似する方向を示す畦畔が検出されている。那珂君休遺跡の水田址Ⅱは水田址Ⅰに先行して営まれた遺構であるが、この水田址では条里方向に一致する方位は見出せない。水田址Ⅰと水田址Ⅱは、極めて近接した時期に相次いで営まれたものとされているが、水田区画など内容的には格段の差がある。那珂君休遺跡の報告者は、水田経営規模についての再編成あるいは牛耕の導入などを想定しているが、その当否は別として、この水田址Ⅰの段階で現在見られる様な条里制地割に則る耕地区画が採用された可能性がある。この条里制との関連については、本章の「3. 条里遺構について」で触れる。

上層水田址における水掛りについては、遺構の上からは明らかにしえなかった。全体的にみれば、標高は南に低くなっている。ただし、前述した如く水田面の検出が困難な地点もあって同一面としての把握が完全にできているかと言えば、若干不安が残る。一応、北から南に水を

おとした可能性を考えるにとどめたい。

畝状遺構については、前章でも触れたが、これを水田裏作とすると、この水田は一辺が30m近くをはかる区画となる。それに対し幅は、8m内外にすぎない。那珂君休遺跡のⅢ層水田址1でも水田裏作の畑が検出されているが、水田区画内はくまなく耕されていた。その例に従えば、30m×8mの水田が復元されるが、周囲の上層水田址と比較して奇異の感を醸れない。一方、畝状遺構の北側には断続的に小溝が検出されている。調査当初は、上層水田址に伴う水利関係の溝と考えたが、上層水田址の足跡が小溝埋土と水田面にまたがって残されていた点や、小溝が推定される水田区画と無関係に入っている点などから、上層水田址に先行すると考えた方が妥当である。これら小溝は、畝状遺構と方向を一にしている。大胆な推測であるが、上層水田址に先行あるいは併行して畑地が存在し、間もなく一部を残して水田に取りこまれたものと考えたい。

上層水田址の時期は、前章で触れた如く13世紀後半から15世紀代までの間と考えられる。

2. 中層遺構面について

中層遺構面で検出した溝状遺構の性格については、未だ判然としない。Tr-13の土層観察によれば、溝状遺構が存在した段階には旧河川はほぼ埋没していたとみられる。よって、旧河川とのかかわりから溝状遺構を考えるのは無理であろう。一方、溝の形状からみると、導水等の目的で計画的に掘削されたものとは考えがたい。調査時の所見では、中層遺構面に水田面が存在した可能性は想定できる。溝状遺構が自然的なものであるにせよ、人為的なものであるにせよ、水田(畑の可能性も当然ある)との関係でとらえるのが妥当であると思われる。

3. 条里遺構について

今回の調査で条里にかかわる遺構として検出できたのは、第1号溝と中層遺構面の溝⑬である。第1号溝と溝⑬とは、約60m離れており、溝⑬が旧河川による砂質土上に穿たれている事もある。土層的には時代関係をとらえることができなかった。また溝⑬は粗砂が堆積しており水が流れていたことを推測させるが、遺物は出土しておらず、時期判定を困難にしている。

第1号溝は、鴻臚館式軒丸瓦を出土した溝である。鴻臚館式軒丸瓦を溝底に密着させていた点から第1号溝の時期を考えれば、8世紀代となる。これは、第1号溝出土の須恵器の年代観から見て、矛盾するものではない。一方、第1号溝出土の瓦器塊を考えると、12世紀という年代が与えられる。前章でも述べたが、第1号溝埋土を覆っている土層から瓦器塊が出土して

おり、第1号溝出土としている瓦器坑も、埋土上層に含まれていた可能性もある。時代の幅が大きすぎるが、一応8世紀以後に掘削され12世紀には埋没しきったものと考えておく。

那珂郡の条里については、日野尚志氏によって詳しく論じられている。それによれば、那珂・御笠・粕屋・席田四郡にまたがる福岡条里区に含まれ、 $N-37^{\circ}-W$ の方位をとる。坪並は、西北隅を1ノ坪、西南隅を36ノ坪とする千鳥式である。第1号溝は、七区一里の27ノ坪と28ノ坪の坪界線にあたる。これは同時に、日野氏による那珂郡衙の中軸線にもあたっている。

日野氏は、「群久」(「君休」)という小字名から那珂郡衙を比定した。また「群久」が南北に五町半あることから、郡衙城を方六町とした。その後、この那珂郡七区一里における発掘調査が6地点行なわれている。那珂深ヲサ遺跡第1次・第2次・第3次調査、那珂君休遺跡第1次・第2次調査、及び今回の那珂久平遺跡の調査である。これらの調査では、ついに郡衙関係の遺構を検出することはできなかった。一方、これらの調査地点は、七区一里の西辺と南半に集中している。したがって、あえて七区一里に郡衙を求めるとすれば、現在下水道終末処理場が立っている東北部しか考えられないことになる。

ところで、全国で郡衙遺跡の調査例は次第に増えてきている。それらによると、郡衙の占める広さは、広くても方二町程度である。また、正倉には稲を貯えるため、台地上に選地するのが一般的である。那珂郡衙の場合、方二町として七区一里の東北部に比定することはできるが、立地の上から難点が残る。すなわち、七区一里は、御笠川が大きく屈曲した部分に位置するがこの屈曲部分を直線的に結ぶとその左岸は、那珂久平遺跡で検出された旧河川の左岸と一致する。那珂久平遺跡では、この左岸以北は旧河川の堆積物である砂層によって埋められている。これが御笠川の流路変遷によるとすれば、那珂久平遺跡から御笠川・諸岡川の合流点付近を結んだ線の北側では、八女粘土すら浸食されていると考えられる。那珂郡衙を七区一里の東北部に比定すれば、郡衙は不安定な砂層の上に立てられたことになる。それは同時に、常に御笠川による水害の脅威にさらされていたことをも意味する。以上の点から考えて、那珂郡衙を七区一里に比定するのは、無理があると考える。第1号溝出土の鴻臚館式瓦は、那珂郡衙とのかかわりよりも、高畑廃寺との関連を考えた方が適当であると思われる。那珂深ヲサ遺跡で高畑廃寺を示すと考えられる「中寺」の墨書須恵器が出土した点、高畑廃寺でも鴻臚館式の軒丸瓦が出土している点からして、無理はないと思う。

第1号溝が埋没した後、条里遺構は一時姿を消す。前述した那珂郡七区一里における6回の調査でも条里遺構は検出されていない。条里をうかがわせる遺構が再びみとめられる様になるのは、前節でもふれたように上層水田址(Ⅲ層水田址1)の段階になってからである。石野博信氏は、古代方画地割について考究され、8世紀に国家的レベルでの条里の施行は行われたが部分的にとどまり、全国的に現存する条里区画が成立したのは12世紀以降であるとされた。こ

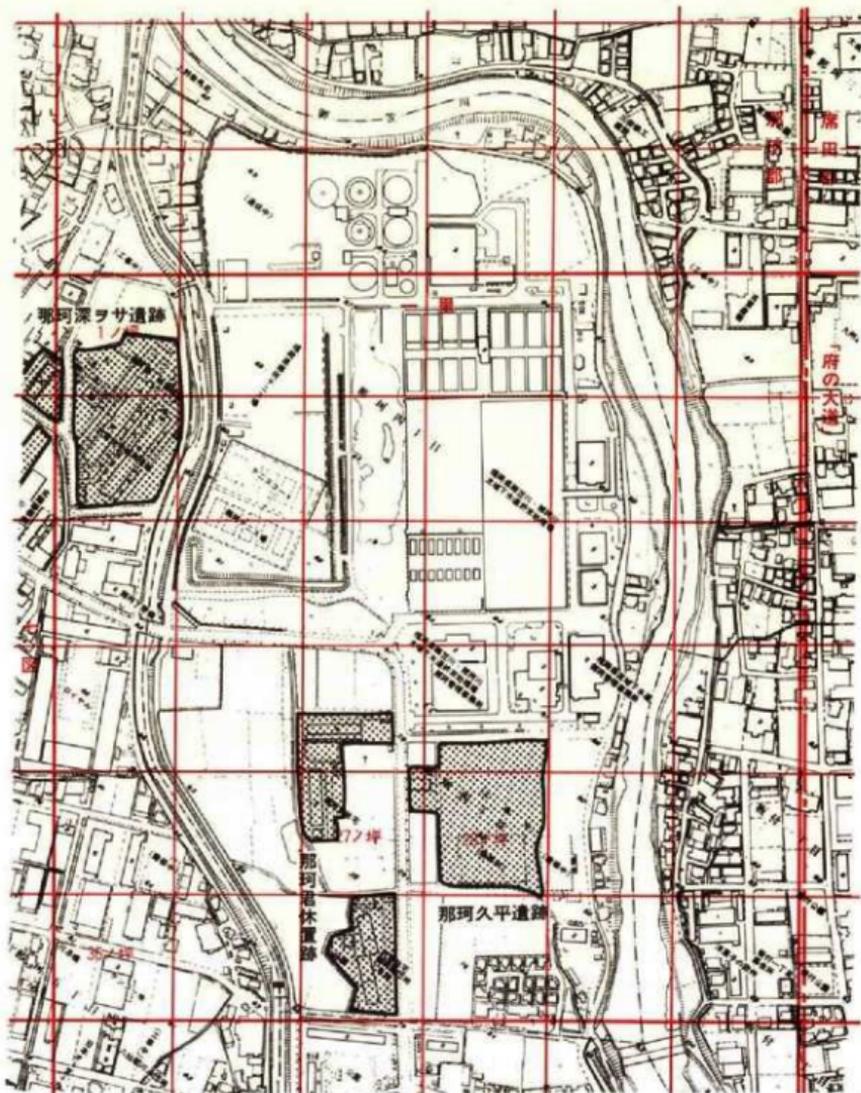


Fig. 33. 推定那珂郡街 (1/5,000) 日野論文をもとに作成

れを那珂郡について見た場合、古代の官道である「府の大道」は中世も生きつづけ、また御笠郡には、「府の大道」と直交する方位をとる水城が存在していた。上層水田址は、これらの古代条里の跡をとどめる道なりを基準として、改めて区画されたのではないだろうか。それを可能にした背景のひとつのあらわれが、那珂岩休遺跡におけるⅢ層水田ⅡからⅢ層水田Ⅰへの水田経営規模の再編成であると思われる。

4. 古墳時代水田址（下層水田址）について

調査当初、下層水田址は弥生時代水田址であると考えていた。それは、下層水田址から出土した遺物が、すべて弥生時代のものであったことによる。しかし、那珂岩休遺跡のⅤ層水田址の整理、報告がなされるに及んで、これに従って年代観を改める必要が生じた。那珂岩休遺跡では、Ⅴ層水田址の下に4世紀後半と考えられる水利遺構が存在し、それらによりⅤ層水田の時期は5世紀前後と比定された。下層水田址がⅤ層水田址にあたることは、水田区画の上からも明瞭である。よって、下層水田址の年代を5世紀前後と考えることとする。

那珂岩休遺跡では、水田を3類に大別している。Ⅰ類は、調査区東北側に見られる水田で、最も河川寄りの低い所に位置し、面積は100㎡前後をはかる。Ⅱ類は、Ⅰ類より高い平坦地に作られたものでⅠ類との間に幅広い畔をもつ、水田形態も一定せず面積もまちまちである。Ⅲ類は等高線にそって作られた水田で面積は15～60㎡をはかる。

これを那珂久平遺跡の下層水田と比較すると、Ⅰ類は方形大規模水田に、Ⅱ類は不整形小規模水田にあたる。なおⅢ類はみとめられない。

また、那珂久平遺跡では北から南に水をおとすのに対し、那珂岩休遺跡では南から北に水をおとしている。最低部にある水田の標高はほとんどかわらないが、那珂岩休遺跡ではここに排水遺構がともなって、南北方向の河川に水をおとしている。

これを見ると、方形大規模区画の水田が南北方向につながることに気付く。延長で110mに及ぶことが確認された。また、不整形小規模水田は、方形大規模水田を囲むように広がっている。那珂岩休遺跡で検出された北流する河川は、那珂久平遺跡の第3号溝につながると思われる（前章参照）。一方、那珂久平遺跡と那珂岩休遺跡の水田面の傾斜は、互に向い合っているから、おそらくこの間で低地が東西方向に走ることが推測される。旧河川（御笠川がその支流）から水をひき那珂久平遺跡の水田をうるおした水と、諸岡川から導水し那珂岩休遺跡を灌漑した水がその低地部分で出会い、ともに北流する河川（諸岡川の支流か）に流れこみ、旧河川に戻って行ったのであろう。

前章では、水田址に残された足跡の様態を5類に分類した。もし下層水田が砂層（第四層）

におおわれたのが農繁期であれば、足跡の残り方にこのような違いは出来ないと思われる。すなわち、足跡の全く残らない水田や2類の様に水利の導線上に足跡が残っている水田は休耕田としても理解できるが、3類・4類・5類については疑問がこののである。3類は、多角形の水田を四角にしか使っていないし、4類の水田に足跡が密で5類に疎であるという差は、同様の耕作を行なっている限り起りえない。4類にいたっては稲株をうる間もない程、足跡が密集しているのである。また水田⑬・⑭でみられたあたかも畦畔の補修を行なっている様な足

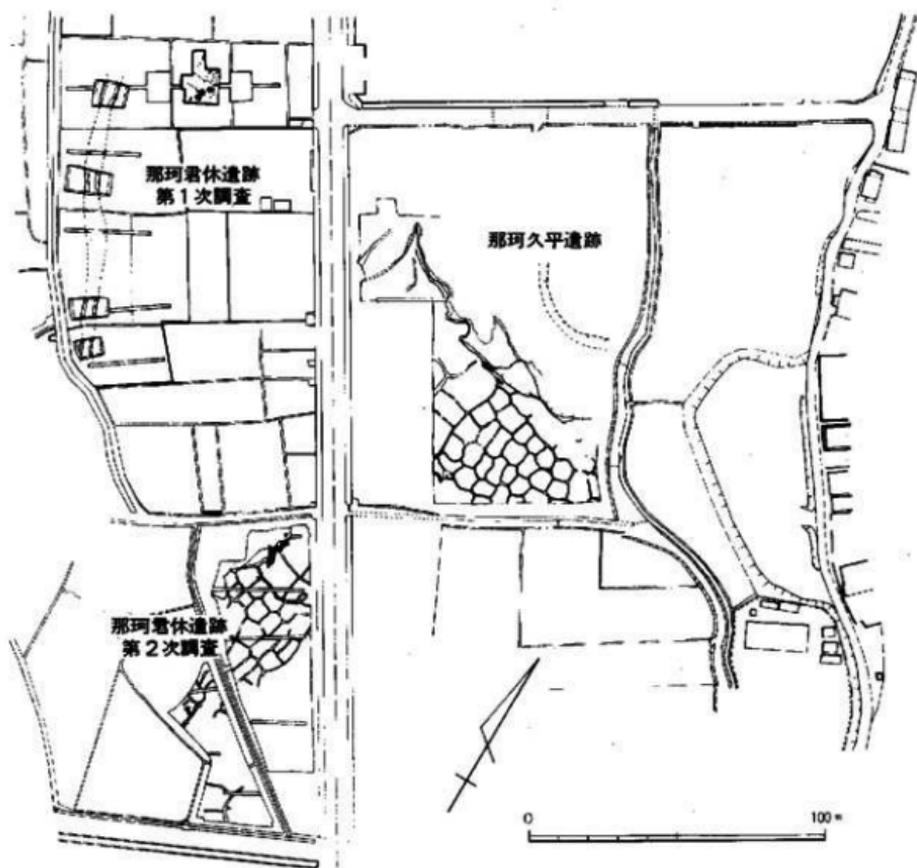


Fig. 34 那珂君休遺跡・那珂久平遺跡古墳時代水田遺構図 (1/2000)

跡も、理解しがたい。むしろ農閑期の水が落ちている間に残された足跡であると考えたい。想像をたくましくすれば、春をむかえ、これから水を張るために水田の畦畔補修などを行っていた頃に洪水によって埋没したものである。なお、那珂君休遺跡では、水田の水口が開いた状態で砂層に覆われている点から、水が落ちた秋～春に埋没した可能性を考えている。

5. 調査上の問題点

水田址の調査には、いくつかの困難がつかまとう。ひとつは、水田面検出の難しさである。砂層にでも覆われていれば容易だが、砂層がみとめられないとなると、上下に連続した粘質土の中から水田址をおさえ、面的に拡げて行くのはほとんど不可能に近いといえる。今回の調査でも、上層水田址で水田を検出しきれなかった部分は、砂層がうすいか見られない部分であった。もうひとつの点は、時期決定が困難であるという点である。生産遺跡という特性もあろうが、遺物がほとんど出土しない状況では、時代の決め手がない。下層水田址においても、もし那珂君休遺跡の調査が行なわれていなかったら、躊躇なく弥生時代の水田址と判断したことであろう。

江戸時代以降の大規模な新田開発地を除けば現代の耕地のほとんどが、遅くとも中世段階には可耕地となっていたであろう。そういう意味では、どこを掘っても水田址なり畑址にあたる筈である。現在の発掘調査技術に限界があるにしても、少しずつの調査成果の積み重ねが、歴史の基礎部分である生産関係を明らかにして行くであろうことを思うとき、慎重な態度でしかも積極的に対処する必要があるのである。

註1. 『那珂君休遺跡Ⅱ』 福岡市埋蔵文化財調査報告書第106集 1984

註2. 日野尚志 「筑前国那珂・席田・柏屋・御笠四郡における冬里について」
佐賀大学教育学部研究論文集24(1) 1976

註3. 山中敏史 「古代郡衙遺跡の再検討」 日本史研究161 1976
山中敏史 「評・郡衙の成立とその意義」 『文化財論叢』

奈良国立文化財研究所創立30周年記念論文集 1983

註4. 『那珂深ヲサ遺跡Ⅱ』 福岡市埋蔵文化財調査報告書第82集 1982

註5. 『板付周辺遺跡調査報告書(9)』 福岡市埋蔵文化財調査報告書第98集 1983

註6. 石野博信 「古代方面地割の整備」 森浩一編『古代史と考古学』 1982

付論 那珂久平遺跡における水田址の調査研究

宮崎大学 藤原 宏志

松田 隆二

那珂久平遺跡は福岡平野の中央部、福岡市博多区の一角に位置する。遺跡周辺には御笠川と諸岡川が流れており、阿蘇カルデラ形成期に生じた中位段丘が発達している。諸岡丘陵、板付丘陵など段丘の丘陵部には縄文時代終末期から現代にいたる集落が分布している。

丘陵間の低地部には各時代の集落経済を支えた生産址が広く分布していることは容易に想定できる。従来の発掘調査により、縄文時代終末期水田址が検出された板付(G7a)遺跡は本遺跡に隣接している。

本調査研究の目的は各時代における生産址とりわけ水田址の様式を実証的に解明するため、プラント・オバール分析法を用いて生産址の包蔵土層とその分布域を推定し、さらに、考古学的調査結果と照合しつつ農耕様式の変遷について検討することにある。

1. 方法

プラント・オバール分析法の詳細については既報を参照されたい。

プラント・オバール定量分析法の効率化にともない、短期間に多量の試料を分析し結果を表示することが可能になった。最近では本調査に先だって行われる試掘調査の際、試掘坑壁あるいはボーリングにより分析試料を採取し生産址の包蔵土層と分布域を推定できるようになった。この生産址探査法の概要を図1に示した。

すでに各地で、この方法に順じた生産址探査が実施されており、条件により多少の精度差はあるがおおむね良好な結果が得られている。最近の報告例では青森・垂柳遺跡、福岡・那珂君休遺跡および仙台・富沢水田遺跡などにおける水田址はこの方法により探査発掘された事例である。

本調査研究においても、試掘調査の段階で試掘坑壁およびボーリング試料を採取し生産址の分布状況を推定することにした。

分析に供した試料は100地点、219試料であり、試掘坑壁からの試料採取は100cc採土用試料円筒を用いた。また、ボーリングには遺物包含層の深さから1.5mのボーリング・スティックで所期の目的が達せられると判断されたので、これを用いることにした。

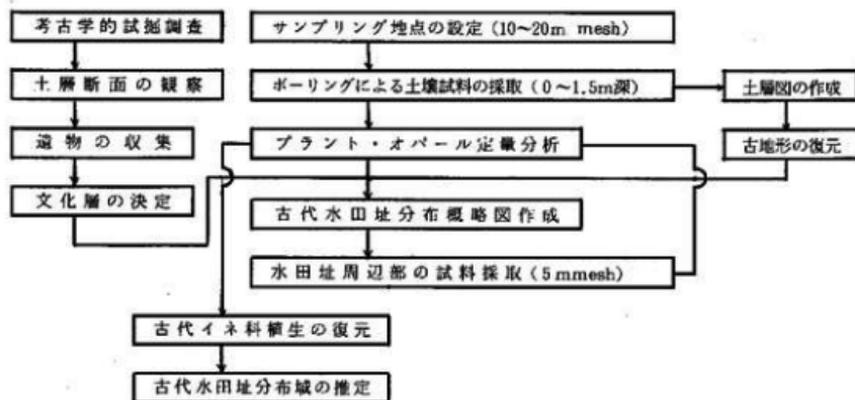


図1. 古代水田址分布域の分析的推定

2. 分析結果

分析結果の一部を図2に示した。

各地点の分析値を総合的に検討した結果、現在の水田（I層）の他に、Ⅲ層およびV・VI層に水田址が埋蔵されている可能性が高いと判断された。

各地点の分析結果をもとに、調査対象域におけるⅢ層およびV層の水田址埋蔵域と旧河道域の推定結果を図3、4に示した。

図4に示した旧河道と水田址域の境界に位置する区域は低湿地ではあるが、イネの量が少なく水田址とは確定できなかったので性格不詳の区域として提示した。

3. 考察および結論

考古学的な遺構・遺物については別に詳論されるので、ここでは検出された遺構・遺物の概要についてプラント・オバール分析結果とともに農学的見地から若干の考察を加えることにしたい。

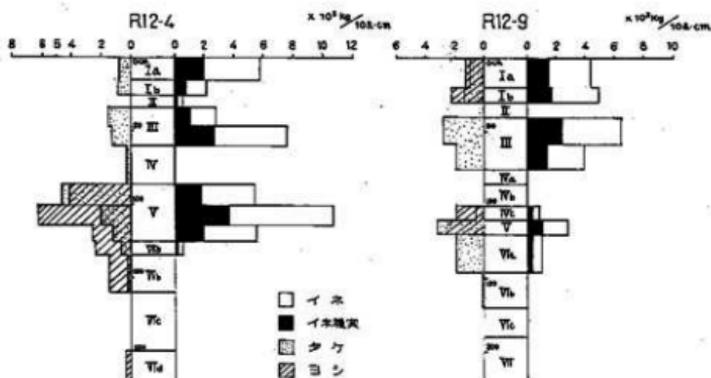


図2. 福岡・那珂久平遺跡におけるプラント・オribaール分析

グラフの見方について

- layers: 採取地点の土層模式図。()内の数字は土層番号, たすみの小数字は表層からの深さをcmで表わしたものである。
- O. sati: *Oryza sativa*. 栽培稲の地上部乾物重.
rice.g : *Oryza sativa*の穎果(稲)乾物重.
Phrag. : *Phragmites communis*. ヨシの地上部乾物重.
Bamb. : *Bambaceae*. タケ亜科の地上部乾物重.
各植物体重はそれぞれの植物により異なる球酸体密度係数と土壌中から検出された各植物に由来するプラント・オribaール密度をもとに算出されたものである。
- 土柱模式図の右側に栽培植物, 同左側に野, 雑草を示している。単位 $t/10a \cdot cm$ はその土層の厚さ1cm, 面積10a (1000 m^2) に含まれるプラント・オribaールの数から推定した各植物の乾物量をt (トン, 1×10^3 kg) で表わしたものである。例えば, その上層が10cmの厚みであると, グラフで示された値に10を乗じた量の植物体とその土層の堆積期間中に生産されたことになる。生産量が年間生産量ではないことに注意されたい。
- 水田址が埋蔵されている土層ではO.satiの値がピークを形成する場合が多い。土層の堆積状況により一概にいえないが, 水田址の層位はこのピークと一致するのが通例である。
- Phrag. (ヨシ), Bamb. (タケ)の乾物量変遷はその地点における土壌水分状況の時代的変遷を知るうえで役立つ。ヨシは比較的水分の多い湿った環境に生育し, タケ(ササ)は比較的乾燥した環境下で繁殖する。両者の消長をみると, その地点の乾湿変化を推定できる。

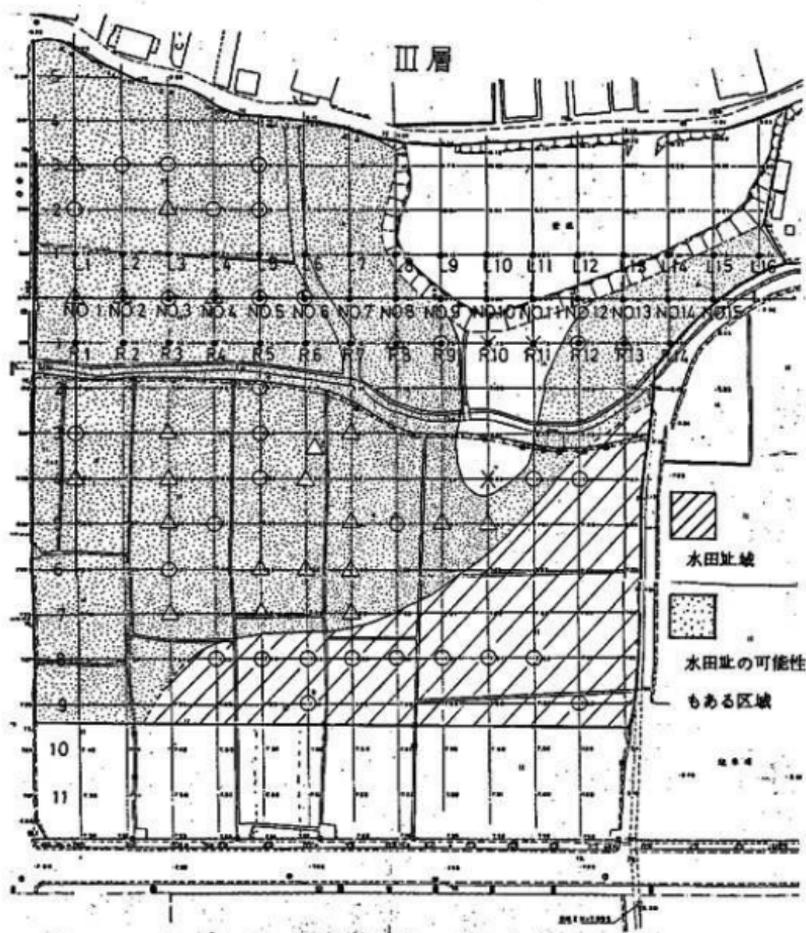


図3. 那珂久平遺跡第III層における水田址包蔵域の推定

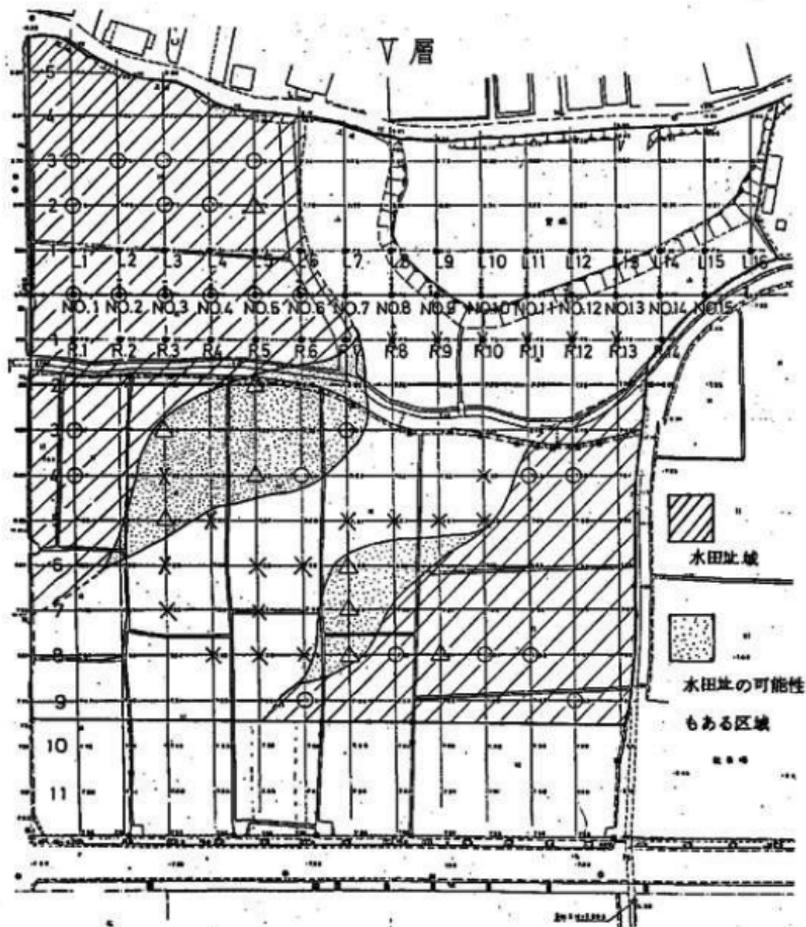


図4. 那珂久平遺跡第V層における水田址包蔵域の推定

(1) 水田址の分析的探査精度

プラント・オバール分析の結果、Ⅲ層とⅤ層に稲作址と判断される区域が分布し、地形および随伴植生からⅤ層は水田址、Ⅲ層は水田址もしくは畑址と推定された。

Ⅲ層、Ⅴ層とも洪水堆積物（Ⅱ層、Ⅳ層）によって埋積されており、同堆積物の粒度・層厚から判断すると、生産址遺構の一部が流出している可能性があると思われた。

発掘調査結果と推定結果を比較してみると、比較的良好一致していることがわかる。

Ⅲ層については、一部を除きほぼ全面が生産址であると推定され、とくに南西部に遺構残存状態の良い部分があると判断された。

発掘調査結果では南西部に畦状遺構と水田畦畔の一部が確認され、中央部付近で溝状遺構が検出された。しかし、北部ではⅡ層洪水層による洗掘が激しく遺構の確認が難しい状態であった。

Ⅴ層については、南部と北部に水田址が分布し、中央部を河が貫流するという推定結果であった。

調査の都合上、北部水田址域は発掘されなかったが、南部の水田址、河川は完掘された。発掘された水田遺構域は推定結果とよく符号しており、ほとんどズレがなかった。

以上の結果から、試掘調査段階における水田址探査法はこの遺跡調査でも精度よく遂行されたことがわかる。

(2) Ⅲ層畦状遺構

農耕にともなう畦状遺構の成因は三種に大別される。一つは畑作にともなうもので、幅40～80cmの比較的大きな畦である。これはさらに畦方向が等高線に平行する型と直行する型に二分される。前者が通常の畑作物を作付ける型であり、後者は陸稲を輪作作物に包含する型と考えられる。後者については群馬・有馬遺跡、北九州・御座遺跡にその例がみられる。

次は水田内に畦が作られる場合である。この場合は基本的に傾斜を持たず、水田裏作として麦などが作付けられたことが想定される。この種の例では本遺跡に隣接する那珂君休遺跡第Ⅲ層の畦状遺構がこれにあたる。

三番目は犁耕による犁跡が畦状に残る場合である。この場合は幅15～20cmで小さな畦状になるのが特徴である。この例としては更埴市・屋代高校構内遺跡の小畦状遺構を挙げることができる。

本遺跡Ⅲ層の東南部で検出された畦状遺構は洗掘により原形を損ねてはいるが幅80cm前後の大畦であり、周囲をとりまく畦畔遺構は検出されていない。プラント・オバール分析の結果イネが検出されており、何らかの稲作施設であることは疑いない。その南西部には水田畦畔の一部とみられる遺構が残っており、当該部にも水田畦畔があったとすれば畦とともに一部残存し

ていてもよいように思われる。当該畦状遺構は畦方向（東→西）に向って若干傾斜している。これらのことを勘案すると、陸稲作を含む畑遺構と考えるのが自然であるが、君休遺跡と同様な水田裏作にともなう畦遺構という見方も完全には否定できない。

（3）V層で検出された水田

V層は弥生時代の遺物を包含しているが、同層で検出された約40枚の水田址は5世紀前後に営なまれた蓋然性が高い。枚の水田面積は30～50㎡であり、形は必ずしも方形ではなく、むしろ六角形に近いものが多い。畜力が導入される以前、すなわち、人力による耕作が行われる段階では、その作業効率からみて、この程度の大きさ、形がむしろ合理的であると思われる。V層水田址の田面には一面に人間の足跡が残されている。人足跡が多量に検出される例は他にも多いが、当該遺跡例も含めて明瞭な規則性が認められないのが通例である。この点については現在までに確認された発掘例を整理しつつある段階であるが、一つの作業仮説として人力による踏耕が行われていた可能性についても検討する必要があると思われる。

（4）V層で検出された堰遺構

試掘調査時に採取した試料の分析結果から旧河道の両側にイネを少量含むかつヨシ・タケなどを多量に包含する有機質土の分布域が確認された。その段階では、この区域を水田址の可能性は少なく、水のよどみのようなものと考えられるが詳細は不明として扱った。発掘調査の結果、幅20～30mの河川を横断するアーチ状の堰が検出され、前述有機質土の分布域は堰が兩岸に接する部分であることがわかった。15000本を越す杭を打ち込んで造られたこの堰は弥生時代のものとしてはその規模において他に類をみない。おそらく、河道兩岸に広がる水田への用水施設の主体部、いわゆる頭首工であろうと思われる。この当時、このような用水施設がすでに存在したこと自体驚く他ないが、換言すれば、当該遺跡の水田稲作技術が如何に高度なものであり、かつ組織的なものであったかを示す証しともいえよう。

圖 版

PLATES

PL. 1



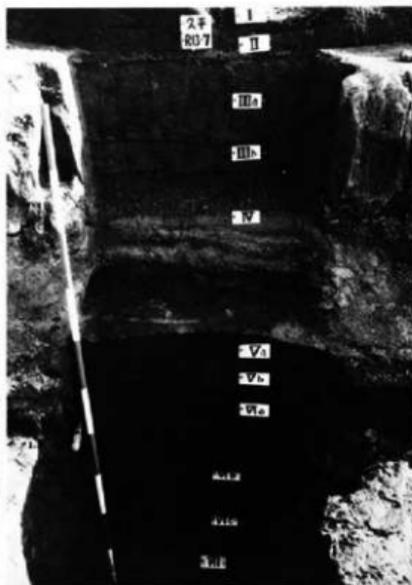
(1) 調査前 (北より)



(2) 調査前 (民有地部分・西北から)



(1) 土層柱状図 No.1



(2) 土層柱状図 No.2

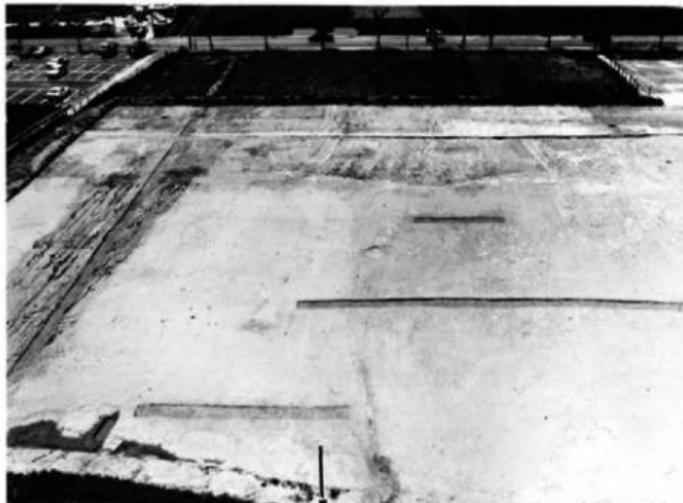


(3) 土層柱状図 No.3



(4) 土層柱状図 No.4

PL. 3



(1) 上層水田址 (北東より)



(2) 上層水田址 (南西より)



(1) 上層水田址 (北より)



(2) 上層水田址 (北西より)



(1) 上層水田址 (東南より)



(2) 上層水田址 (北東より)



(1) 上層水田址 (民有地・北西より)



(2) 上層水田址 (民有地・西より)

PL. 7



(1) 上層水田址畦畔 (北東より)



(2) 上層水田址畦畔 (南西より)



(1) 上層水田址畦畔 (南西より)



(2) 上層水田址畦畔 (北東より)



(1) 上層水田址畝状遺構（北東より）



(2) 上層水田址畝状遺構（南西より）



(1) Tr-2. 土層状況 (北より)



(2) Tr-2. 旧河川土層状況 (西北より)



(1) Tr-12. 土層状況 (西より)



(2) Tr-13. 土層状況 (西より)



(1) Tr-13. 土層状況 (北西より)



(2) Tr-13. 土層状況 (北西より)



(1) Tr-15. 土層状況 (南東より)



(2) Tr-16. 土層状況 (北東より)



(1) Tr-16. 土層状況 (西北より)



(2) Tr-16. 土層状況 (西北より)



(1) Tr-16. 土器出土状況 (西北より)



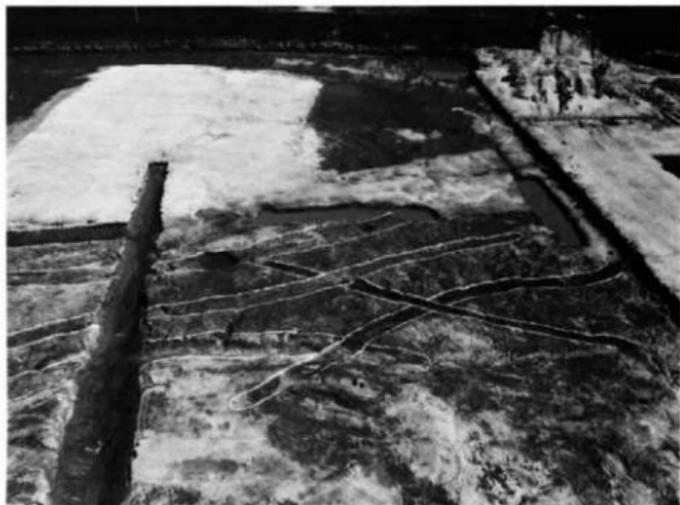
(2) Tr-16. 土器出土状況



(1) Tr-19. 土層状況 (西より)



(2) 中層遺構面土器出土状況 (東南より)



(1) 中層遺構面溝群 (北東より)



(2) 中層遺構面溝群 (南東より)



(1) 第1号溝・第2号溝・第3号溝遠景 (北東より)



(2) 第1号溝土層状況 (東南より)



(1) 第1号溝軒丸瓦出土状況（南東より）



(2) 第1号溝軒丸瓦出土状況（南西より）



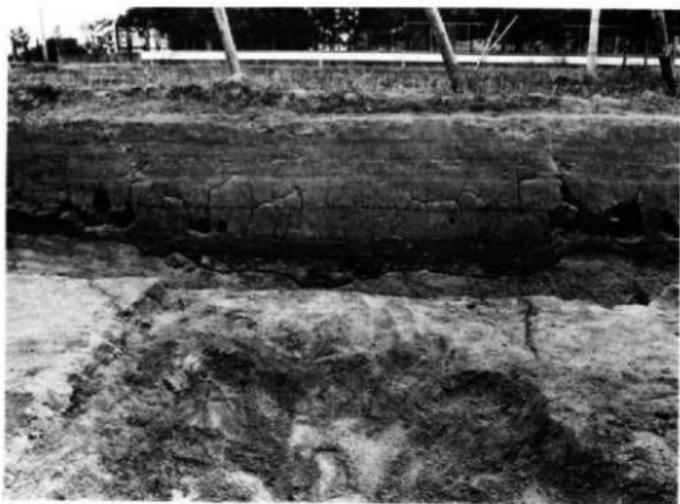
(1) 第1号溝 (南東より)



(2) 第1号溝 (北西より)



(1) 第1号溝 (西より)



(2) 第1号溝 A—A断面土層状況 (南東より)



(1) 第1号溝・第2号溝土層状況（北西より）



(2) 第2号溝（南より）



(1) 第3号溝検出中 (北西より)



(2) 第3号溝土層状況 (南より)



(1) 第3号溝土層状況 (Tr-22、北より)



(2) 第3号溝土層状況 (Tr-22、北より)



(1) 第3号溝土層状況 (Tr-22, 北より)



(2) 第3号溝土層状況 (Tr-22, 北より)



(1) 下層水田址足跡検出状況



(2) 下層水田址足跡検出状況



(1) 下層水田址・井堰遺構全景（西より）



(2) 下層水田址・井堰遺構全景（南より）



(1) 下層水田址・井堰遺構全景 (東より)



(2) 下層水田址全景 (南西より)



(1) 下層水田址全景 (北東より)



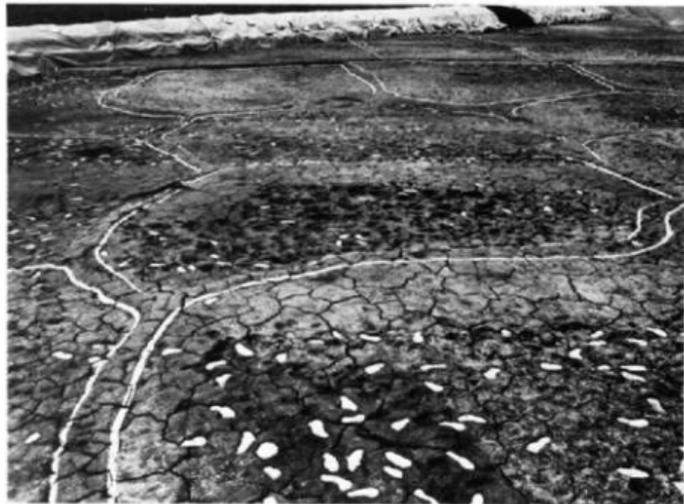
(2) 下層水田址全景 (西北より)



(1) 下層水田址河岸 (西より)



(2) 下層水田址、手前より、2016(2)99 (西より)



(1) 下層水田址、(東より大睦峠、 25 41 をのぞむ)



(2) 下層水田址、 25 (南より)



(1) 下層水田址、手前より、⑭⑮⑯ (南西より)



(2) 下層水田址、⑲ (南より)



(1) 下層水田址、20 畦畔沿い足跡 (西北より)



(2) 下層水田址、20 畦畔沿い足跡 (北より)



(1) 下層水田址水口、手前より、4000 (西より)



(2) 下層水田址水口、左より、4000 (南より)



(1) 下層水田址水口、手前⑨、左⑧、右⑦ (西より)



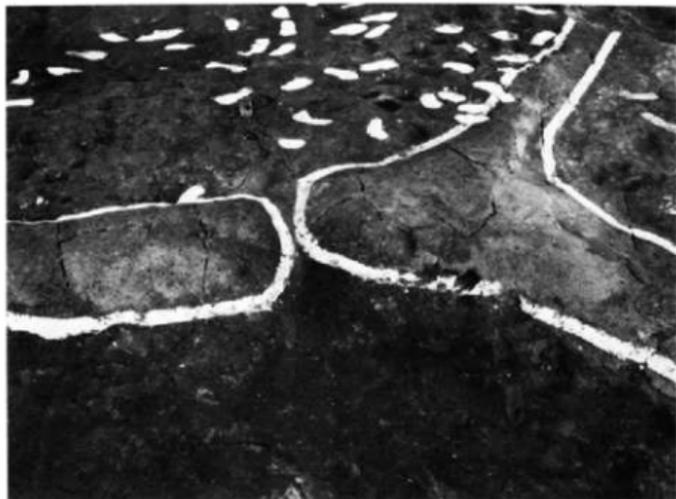
(2) 下層水田址水口、左⑧、右⑦ (南より)



(1) 下層水田址水口、手前⑬、⑭ (東より)



(2) 下層水田址水口、手前⑬、⑭ (西より)



(1) 下層水田址水口、手の①、② (南より)



(2) 下層水田址水口、左③、右④ (東南より)



(1) 下層水田址水口、手前②③ (北西より)



(2) 下層水田址水口、左④、右⑤ (北東より)



(1) 下層水田址水口、左28、右28 (北東より)



(2) 下層水田址水口、手前13、13 (西南より)



下層田水田址三叉畦畔

PL. 41



(1) SX01 (西北より)



(2) SX01 (東南より)



(1) SXO1 (西より)



(2) SXO1 (西より)



(1) 筒状遺構 (南より)



(2) 筒状遺構 (東より)



(1) 舟状遺構 (北より)



(2) 舟状遺構 (東より)



管状遺構木製品出土状況



(1) Tr-24. 土層状況 (東より)



(2) Tr-24. 土層状況 (東北より)



(1) 井堰遺構右岸接岸部分 (西より)



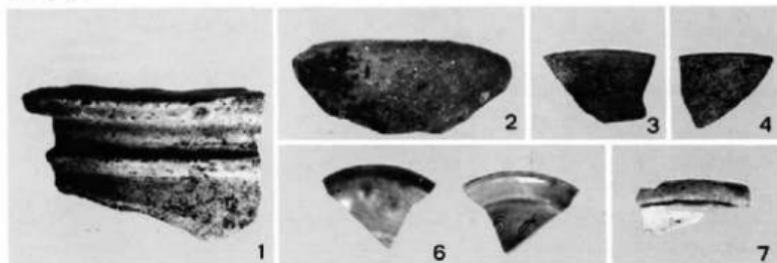
(2) Tr-25. 土層状況 (西南より)



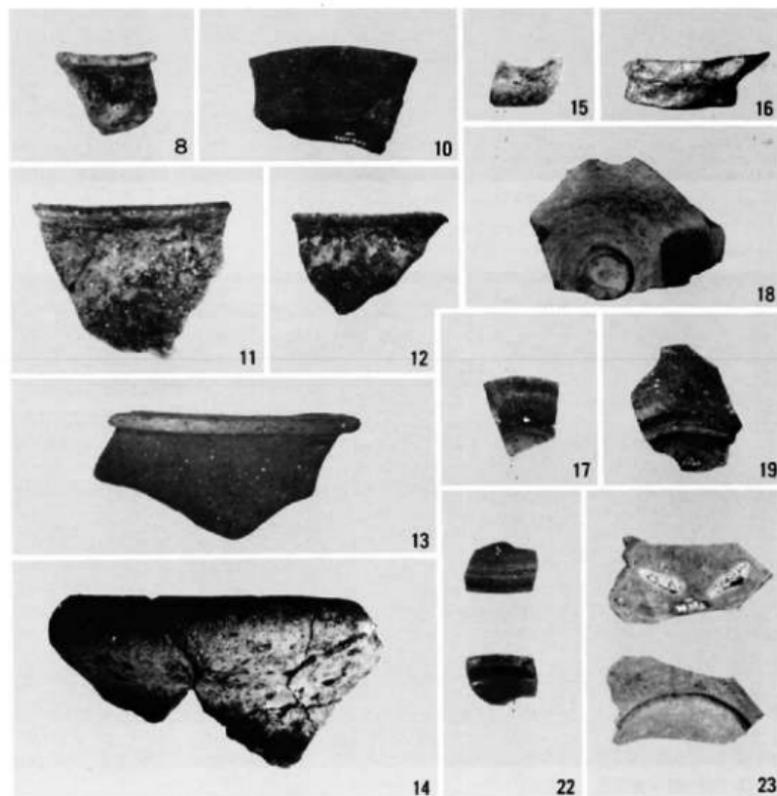
(1) Tr-25土層状況 (西より)



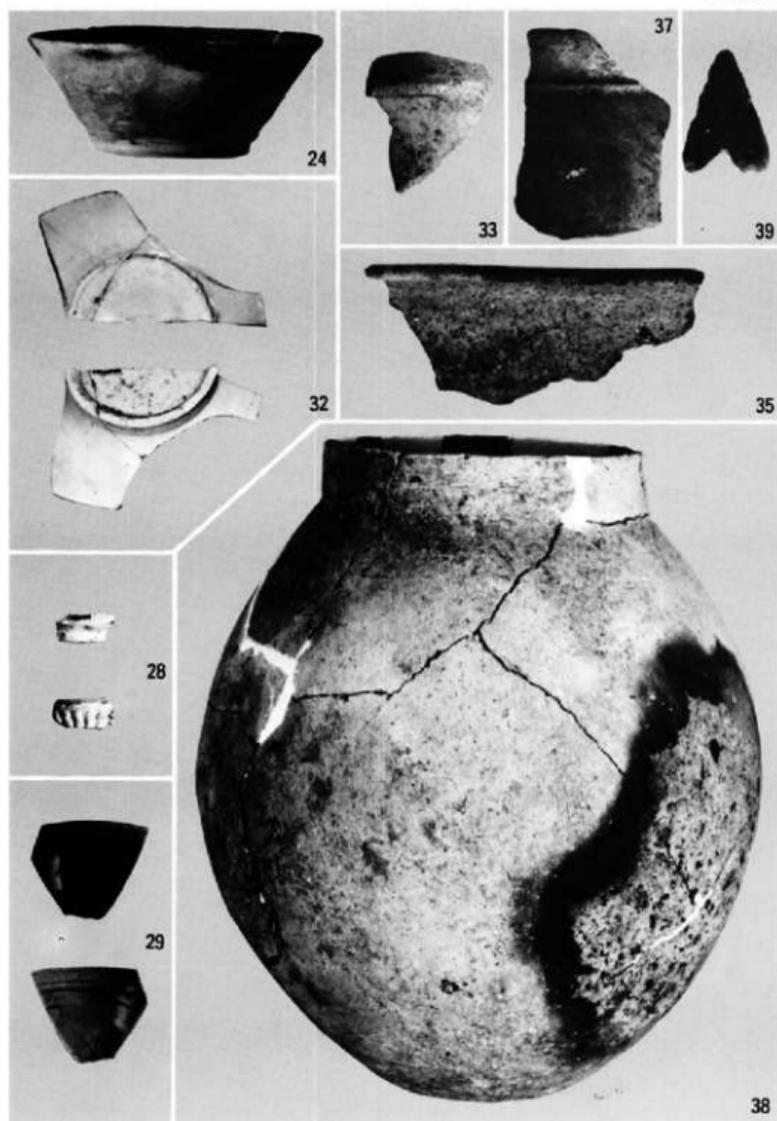
(2) Tr-25土層状況 (西より)



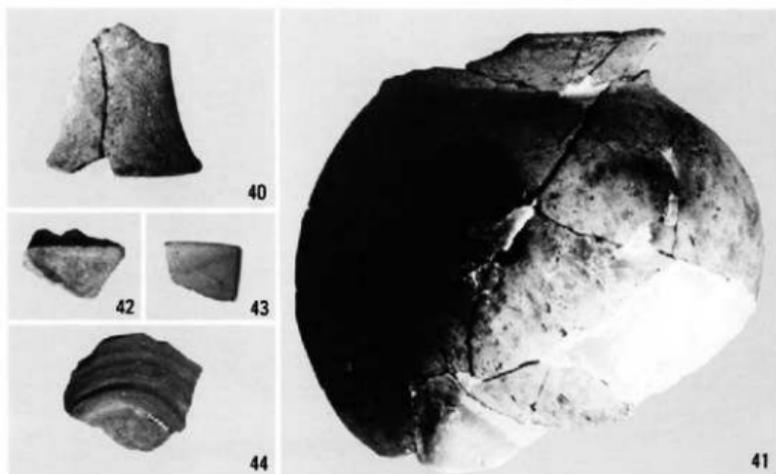
(1) II b層出土遺物 (1/3)



(2) 上層水田址出土遺物 (1/3)



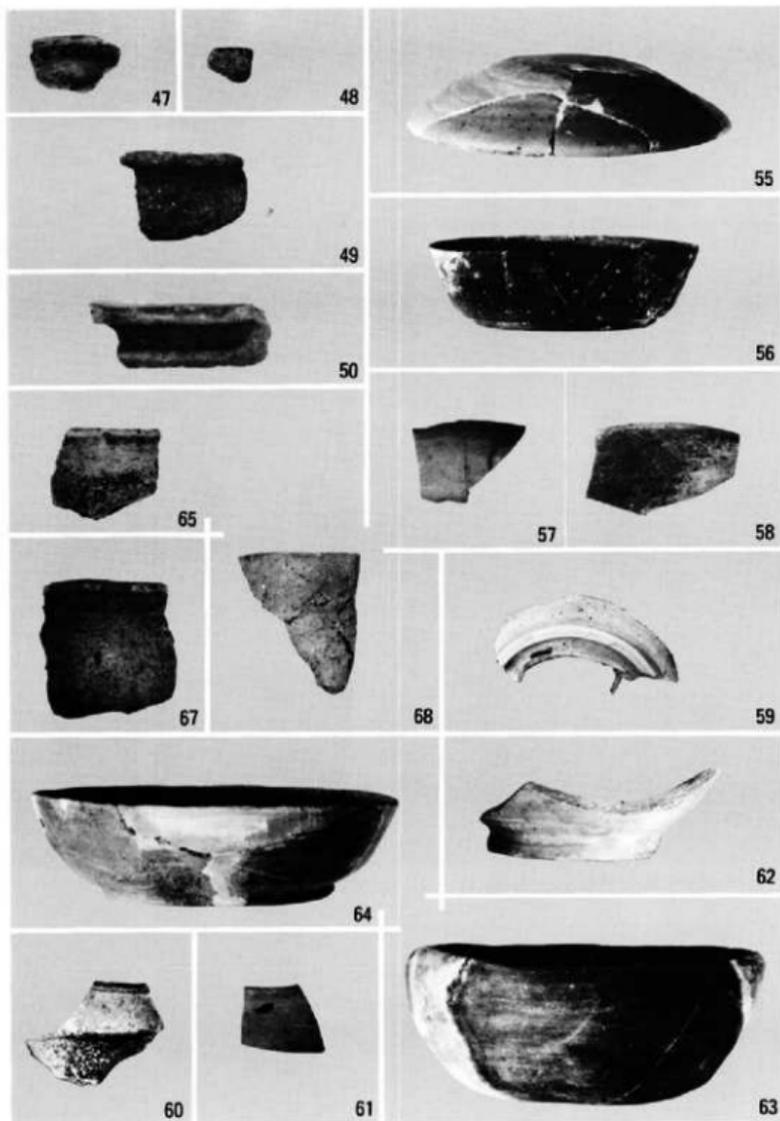
トレンチ出土遺物 (1/3、39-1/1)



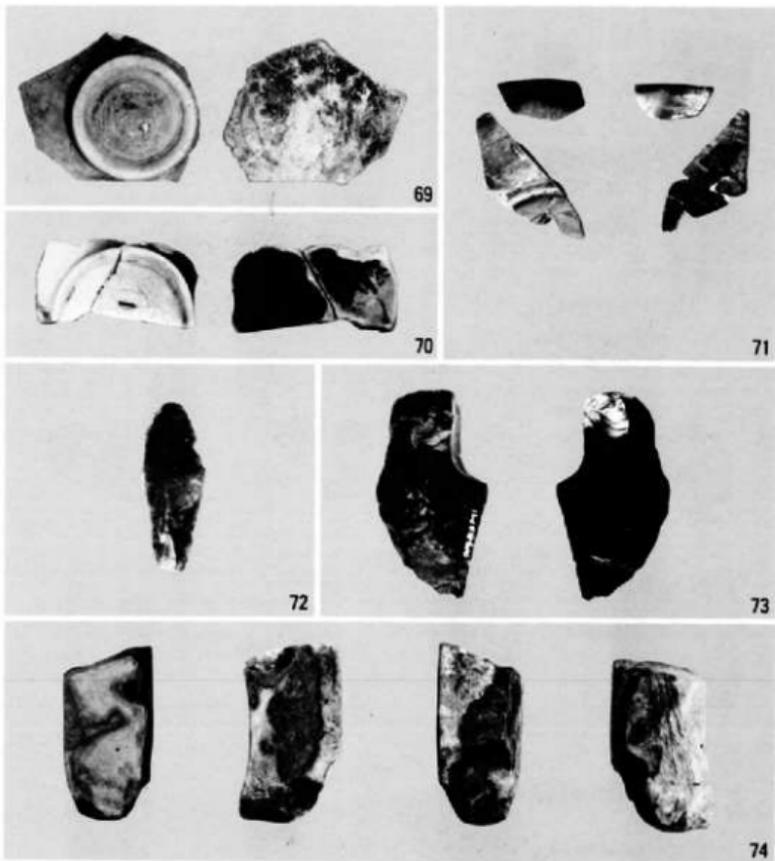
(1) 中層遺構面出土遺物 (1/3)



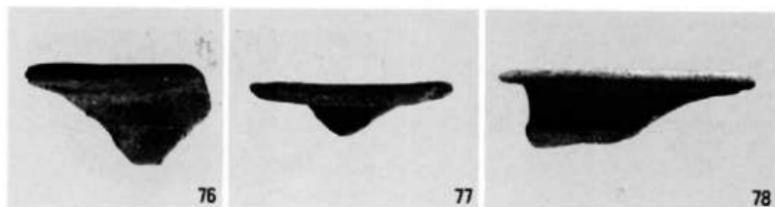
(2) 第1号溝出土遺物1 (1/3)



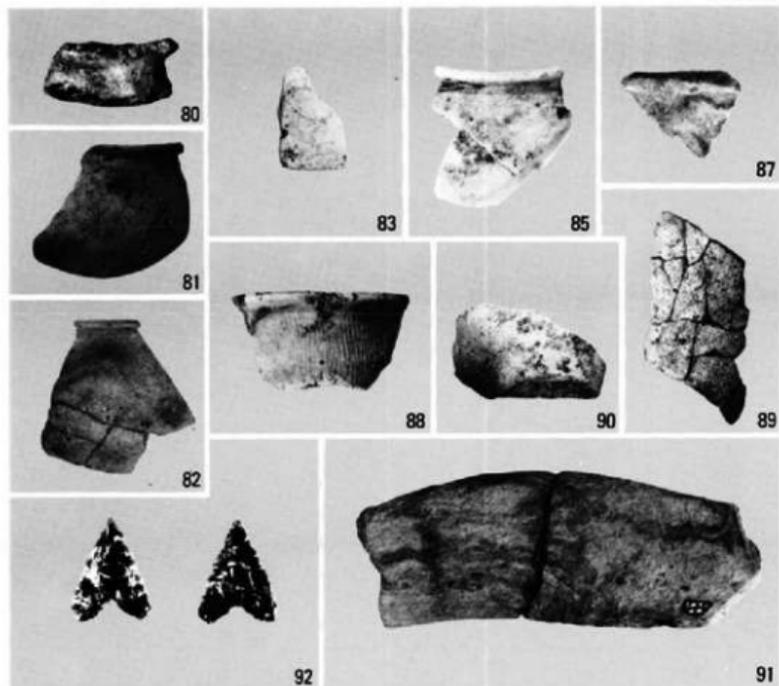
第1号溝出土遺物2 (1/3)



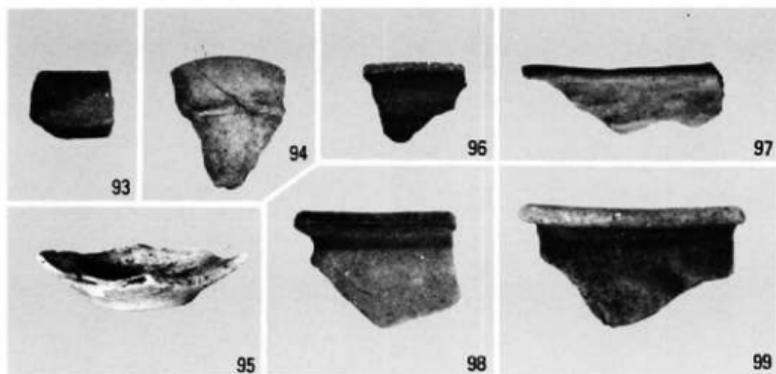
(1) 第1号溝出土遺物3 (1/3、72・73…1/1、74…1/2)



(2) 第2号溝出土遺物 (1/3)



(1) 下層水田址出土遺物 (1/3、91…1/2、92…1/1)



(2) 笥状遺構出土遺物 (1/3)

那珂久平遺跡 I

福岡市埋藏文化財調査報告書第133集

1986年(昭和61年)3月31日

発行 福岡市教育委員会
印刷 株式会社 川島弘文社

